

## 雑報

雑誌名	龍南會雑誌
巻	1 0 1
ページ	6 4 - 1 2 6
発行年	1903-10-24
その他の言語のタイトル	雑報
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/5611">http://hdl.handle.net/2298/5611</a>

# 報

## ○卒業証書授與式

七月一日、本校工學部第三回、大學豫科第十二回卒業証書授與式を舉行せらる。午前八時三十分、職員生徒及び來賓諸氏は、式場なる雨天体操場に着席し、櫻井學校長は先づ前學年に於ける學事の報告をせらる、終りて本回卒業生なる工學部十七名、大學豫科百四十三名へ卒業証書を授與せられ、懇篤なる告辭を朗讀せらる。之に對し工學部卒業生總代前原重晴氏、大學豫科卒業生總代池田隆德氏の答辭あり。次に奥教授は職員總代として、田中猛氏は學生總代として養雪夫氏は生徒總代として何れも祝辭を朗讀せらる、又來賓清國人葉錫麒氏の祝詞あり。之にて全く式を畢り、直ちに瑞邦館にて卒業生送別茶話會を催はし正午十二時散會せり。

六十四

本年卒業生の姓名は左の如し。

工學部第三回卒業生

土木工學科(九名)

五十一 嵐 巖(大阪)

前原 重晴(熊本)

田中 傳 吾(福岡)

松井 眞太郎(福岡)

河端 八郎(熊本)

關 勝 馬(大分)

美野 君 造(大分)

相良 又吉(鹿嶋)

二日市 貞一(大分)

機械工學科(八名)

高尾 正明(福岡)

中野 春藏(福岡)

野口 貫一(佐賀)

廣瀬 彌太郎(香川)

野村 貞(熊本)

吉武 千代藏(福岡)

相 良 巽(長崎)

深水 文質(熊本)

大學豫科第十二回卒業生

〔○は京都大學へ進み、△は福岡大學へ進入〕

第一部法科(四十六名)

青 木 新(熊本)

山崎 達之輔(福岡)

○永山 善之助(鹿嶋)

山室 宗文(熊本)

田中 鐵三郎(佐賀)

○有 田 晴太郎(佐賀)

- 新開 諦觀(熊本) ○阿部 讓(大分)  
 ○咲花 一二三(宮) 別府 賢吉(福岡)  
 ○合志 淵藏(熊本) ○東 尙達(熊本)  
 ○山口 清二(鹿嶋) ○小島 祐馬(高知)  
 ○柳川 兵一(島根) 伊東 喜八郎(大分)  
 ○木下 志朗(鳥取) ○花田 大五郎(福岡)  
 藤井 全之(熊本) ○鈴木 秀人(熊本)  
 田中 謙一(大分) 谷口 保太郎(熊本)  
 ○坂田 豐秋(福岡) 阿河部 貞雄(熊本)  
 ○齋藤 三郎(熊本) ○赤木 歌吉(香川)  
 ○竹田 菅雄(熊本) 小野 彦三郎(大分)  
 ○倉元 慎吾(鹿嶋) 原 義龍(熊本)  
 ○久原 省己(長崎) 中島 爲喜(熊本)  
 ○淡輪 熊一(福岡) ○山口 織之進(鹿嶋)  
 ○渡邊 仁平(熊本) 山口 均四郎(長崎)  
 ○柿原 得一(宮崎) ○山口 經治(岡山)  
 津守 歡三(愛媛) ○佐藤 適(佐賀)  
 ○星子 末雄(熊本) ○河野 龜治(岡山)
- 柳本 茂(大分) ○多田 吉鍾(長崎)  
 ○青木 利光(福岡) ○入水 新七(宮崎)  
 第一部文科(二十四名)  
 草野 喜代志(佐賀) 福島 高(大分)  
 ○大石 清磨(高知) 城戸 元亮(熊本)  
 今岡 信一郎(島根) 平野 乍(熊本)  
 白川 精一(福岡) 鴻巢 盛廣(岐阜)  
 續 有節(熊本) 柴田 貞一(長崎)  
 川井田 藤助(鹿嶋) 小山 令之(熊本)  
 岡部 次郎(大分) 吉川 秀雄(長崎)  
 内田 亨(福岡) 村田 修時(熊本)  
 高尾 常磐(福岡) 古庄 嘉一(熊本)  
 市川 要四郎(佐賀) 荒木 廣(佐賀)  
 丸山 篤(大分) 後藤 朝太郎(愛媛)  
 園田 春耕(熊本) 魚住 惇吉(福岡)  
 第二部工科(二十八名)  
 萩尾 管次郎(福岡) 菰田 成亮(熊本)  
 小山 精一(熊本) ○中島 卓爾(福岡)

中村 崎造(福岡)

○兒 玉 高(長崎)

值賀 龍夫(熊本)

草野 嶽男(鹿島)

德永 保喜(熊本)

矢 野 漸(大阪)

錦 織 義教(島根)

伊 森 賢三(福岡)

渡部 唯助(島根)

社家間 房吉(福岡)

馬 場 堅一(鹿島)

井 上 重則(兵庫)

山 元 喜二(鹿島)

○德永 武雄(熊本)

船 山 右松(宮崎)

肥 後 俊彦(鹿島)

副島 四郎(佐賀)

中 島 鎮(福岡)

林 常 夫(滋賀)

二階堂 行敏(鹿島)

山 下 孝一(佐賀)

津 城 守太郎(福岡)

第三部醫科(二十八名)

△後藤 七郎(福岡)

藤 本 一(熊本)

平 野 武彦(福岡)

△藤澤 幹二(福岡)

△後藤 靖(熊本)

大西 喜一(愛媛)

○志垣 孝次郎(熊本)

池 田 隆德(福岡)

内 藤 靖(熊本)

小野 義雄(大分)

○田 中 悟(福岡)

下 永 寛吾(熊本)

木 下 熊雄(熊本)

○岡本 松喜(熊本)

○上島 五一郎(大阪)

△副島 清一(佐賀)

△小澄 任市(熊本)

○今永 徹次郎(福岡)

○安藤 壽雄(長崎)

南 守 雄(福岡)

田 所 喜久馬(高知)

熊澤 勁太郎(福岡)

中 束 光太郎(宮崎)

細木 阿豆三(高知)

△中井 忠三(香川)

吉 國 半五(鹿島)

田 畑 助四郎(熊本)

△小 川 勇(愛媛)

△小池 耕吉(島根)

河野 德助(宮崎)

○野原 彝夫(大分)

○弘岡 道明(愛媛)

○高崎 佐太郎(福岡)

惠 利 惠(福岡)

片 山 量平(長崎)

園 田 克巳(大分)

△長尾 正保(高知)

○脇田 貞三(鹿島)

奥 川 純二(佐賀)

○黒川 健士(大分)

## 第二部農科(十名)

○山田 俊郎(福岡)

○田上 嘉藏(熊本)

○恒 達 新(福岡) ○有川 惠藏(慶島)

○松見 辰一郎(熊本) ○吉田 由道(大分)

又當日の學事報告は左の如し。

### 學 事 報 告

一、生徒 本學年末現在生徒工學部ニ於テハ、今回ノ卒業生ヲ加ヘ、百六十九名、大學豫科ニ於テハ同卒業生ヲ加ヘ、六百二十三名、計七百九十二名ナリ。

前年七月ヨリ本年六月ニ至ル入學者及退學者ノ種類員數ヲ學アレハ左ノ如シ。

一入學者 工學部四十五名、大學豫科二百二十三名、計二百六十八名ナリ

内

再入學セシ者

二名

中學校ヲ卒業セシ者

二百六十六名

一退學者 工學部十九名、大學豫科三十三名、計五十二名ナリ

内

願ニ依リ退學セシ者

三十八名

除名ノ處分ヲ受ケシ者

十名

放校ノ處分ヲ受ケシ者

三名

### 死 亡 者

來學年ニ於ケル工學部土木、機械兩工學科第一年度生徒凡ソ各三十名ヲ中學卒業者ヨリ募集シタリ、其志願者ハ土木工學科ニ三十二名、機械工學科ニ四十三名、計七十五名ニシテ孰レモ豫定人員ニ超過シタルヲ以テ選拔試験ヲ舉行、不

ルコトトセリ

大學豫科ニ於ケル生徒ノ募集ハ本學年ヨリ文部省ニ於テ執行シ之ヲ各高等學校ニ配當スルコトナリタリ、而シテ來學年ニ於ケル募集人員中配當ヲ受ケベキ本校第一年度入學者ノ豫定員數ハ第一部百二十名、第二部七十名、第三部四十名、計二百三十名ナリ、

二、學科 工學部ニ在リテハ製圖ノ時間ヲ減ジテ實習ノ時間ヲ増シ、學說ト實習トノ調和ヲ計リ、生徒ノ實力ヲ増進センコトヲ企圖セリ、機械工場及材料試験室ハ本學年ニ於テ稍其設備ヲ整頓シタリト雖モ、未タ充分ナリト謂フベカラズ、故ニ年々新機械ヲ増加シ生徒ノ研究ト實習トニ資セントス、

大學豫科ニ在リテハ本學年ヨリ佛文學科志望者ニ課スル課程ヲ廢シタリ、

其他前學年ト異ル所ナシ、

三、教員 教授三十三名、助教授五名、講師三名、囑託數

員十名、雇外國教師三名、計五十四名ナリ

四、卒業生 本日証書ヲ授與スルモノ王學部ニアリテハ十七名ニシテ總テ中學校ヲ卒業ノ上入學セシ者ナリ、之ヲ學科ニ區別スレバ、土木工學科九名、機械工學科八名ニシテ其齡ハ最長二十九年七ヶ月、最少二十二年九ヶ月、平均二十五歳七ヶ月ナリ、而シテ卒業者ノ大部分ハ既ニ採用ノ申込ヲ受ケタルヲ以テ悉ク職ニ就クノ日モ亦遠キニアラザルベシ、

大學豫科ニアリテハ百四十三名ニシテ悉ク中學校卒業ノ上入學セシ者ナリ、之ヲ志望學科ニ區別スレバ法科四十六名、文科二十四名、工科二十八名、理科七名、農科十名、醫科二十八名ニシテ其年齡ハ最長二十七年最少十九歳八ヶ月平均二十二歳九ヶ月ナリ、

工學部ニ於ケル第二回即前學年卒業生ノ現況ヲ擧グレバ官衙ニ奉職中ノ者十名、學校ノ教員タル者三名、會社ニ從事中ノ者六名、計十九名ニシテ第一回ノ卒業生ニ加フレバ官衙ニ奉職中ノ者十三名、學校ノ教員タルモノ三名、會社ニ從事中ノ者十一名、自ラ業ヲ營ム者一名、計二十八名ナリ、而シテ孰レモ成績佳良ニシテ漸次重用セラレツゝアルハ聊カ本校ノ榮トスル所ナリ、

大學豫科 テハ明治二十五年第一回ノ卒業生ヨリ本年ノ

卒業生ニ至ル其數一千百九十三名ニシテ之ヲ志望學科ニ區別スレバ法科四百五十五名、文科百九十三名、工科二百七十七名、理科三十九名、農科三十五名、醫科百九十四名ナリ。

## ○新學年來

秋昊高く澄みて瀟氣空に充てり。是の時に當りて吾人は茲に新學年を迎ふ。知らず、如何の覺悟を以て之に對せんとするか。

思へば歳華流れて學年も亦之と共に改まり、昨、新學年として迎へしもの、今や之を擧げて無限大の過去中に葬り去りぬ。此の如くして、年々歳々、新學年を迎ふるも、而かも吾人は此の期に際する毎に、未だ嘗て其感を新にせずんばあらず。夫れ人生は向上也、精進也、之を充たせば六合に瀰り、之を養へば天地に參すべき吾人の心靈、が濁惡の有限界を脱して理想の無限界に同化せんとするの活動也。更に之を切言すれば、人格を完成せんがための奮闘場裡たる也。而して

吾人は一階又一階、其の歷程を攀ぢて、今や再び新學年に會す。顧盼して前後を望めば、過去やミステリーの濃霧に隠れ去るも、前途は高く榮光の玉座に迫りつゝあるにあらずや。奮へ。神明の照覽する所、前賢の環堵する所、吾人は兀々之を登り盡さざるべからず。見ずや彩雲赫耀たるの邊、天の萬軍其の樂を奏して、吾人の行色を壯にしつつあるを。

人生の意義を悟了し得て吾人の存在は初めて眞實也。彼の學問や權勢や富貴や果して何等の價値を有するものぞ。一時は堂々の外觀を呈せんも、忽ちにしてタイムの磨滅する所となるべきのみ。只人格は不朽也不滅也、世を経るも之と共に亡ぶるなく昭々乎として長く天地と共に存せん。吾人之を完うするに至て人生の能事了る。嗚呼人の子、信薄く根鈍く、徒らに眼前の小利害に齷齪して、動もすれば此の根本の問題を閑却せんとす。新學年の來る、豈此の秘義を齎ら

して、深く吾人の考慮を促さんとするにあらずるか。願くは心を持つる堅固に事を構ふる遠大なれ、顧みて人生一大事實の磐若上に汝が行動の根底を据ゑよ。若し夫れ漫然として校堂に上り茫乎として章句の講習を是れ專にする如くんば、吾人其の可なるを知らざる也。智育や、体育や一に人格完成の目的を達せんが爲に身心に攝取する糧食の如きに過ぎず。此の關係を知らずして單に所謂學校生活にのみ得々たりしもの、社會に出でて後如何の果をか結べりとする、殷鑑遠からず、近く教料書事件に見よ。

今や講學の最好季節と稱せらるゝ時、群書讀破すべく、山川跋涉すべし、只吾人は茲に七旬の間其の英氣を養ひ來れる滿校の同窓と共に其の勉強をして之を無意義に終らしめざらんことを欲す。願くは諸氏其態度を明にして以て事に茲に従はれんことを。

## 新入生諸君を迎ふ

曩に百餘の卒業生諸氏を送りて、校庭轉た寂寞を感ぜしに今や三百に近き新入の諸君を迎ふるに至りぬ。舊を送り新を迎ふるは是れ年々歲々の事、特に言を須ぬずと雖も、而も諸君は今後共に吾人と學び吾人と遊ばんとするもの、吾人は新に同學俱遊の友を得て頗る欣躍の情に堪へざるものあり、即ち茲に一辭を草す亦可ならんか。

夫れ諸君は各地中學の英雋、考試の間に幾多の儕輩を凌いで本校に來り投せられたるもの、吾人は青春の意氣燃ゆるが如き諸君の活動に依り、剛健の氣を以て鳴れる我が龍南の天地が、更に竿頭一步の進運あるべきを期し、甚だ未來の光明を祝福するものなり、然りと雖とも諸君は中學五年の間、各々異なる教風に於て育成せられ來りしもの、今一朝にして同一校風の下に融化せんと試むるは或は難事なるべきも、希くは能

く其美の存する所と弊の在る所とを通觀し取捨し茲に新なる覺悟を以て吾人青年の大本領を自覺し、以て活氣あり氣骨ある正大の校風樹立に努められよ。

頭を回らせは塵世の腐敗も亦甚しいかな、黄金の魔力は到る所に浸灌して節義の風は遂に索むるに由なく、人は營々として宛ながら曠野の落糞に信なく愛なく索然として宛ながら曠野の落糞に似たり、斯くの如くにして誰か明治の聖世と呼び、二十世紀の文明と唱ふるものぞ。今にして此の汚風を肅清し頽波を回すにあらずんば或は羅馬の覆轍を再びするやの憂なきにあらざるべし。然り而して此の肅清の大任は確かに吾人が任務の一部なるべきを信す。

今の青年が人としての修養を怠れるも亦甚しからずや。さはれ吾人は諸君の多くが能く各自の本領を自覺して精進努力せるを信す、望むらくは更に勉めて圓滿なる心靈の發達を期せよ、若



し蠢々として辭書の奴隸たるに甘んじ意氣銷沈して彼のブツクウォームの徒となり丁らば、吾人が懷抱せし多大の希望は空しく失望と變じ吾人三年の歲月亦何等の意氣をも有せざるに至りぬべし。

由來我が校が天下の學界に雄視せし所以のものは、實に九州青年の精華たる剛毅樸訥の氣風を鍾めしが故にしてこは諸君が亦た夙に耳にせし所ならん。夫れ吾人青年が修むべき道德の律則は二三にして足らずと雖ども、淳朴の質は蓋しそが主腦たるべきものならん、廉耻の風之れより出で禮讓の義之れより發す、彼の單に之を外装を修飾するもの、如く解するは蓋し野人の言のみ。想ふに最も保ち難きは質實朴素にして最も陷り易きは華奢遊惰なりとすれば、永く質素の風を保ちて陷々たる世の頹勢に移されざりし我が校風が燦然天下の學界に一異彩を放てりしも宜ならずや。今や諸君は入りて吾人と共に我

校にあり、以後我が校風の隆替は一に懸りて諸君の双肩に在りと謂ふべし、諸君先づ我校なりとの觀念を深くせよ、而して之を愛し之を敬し以て我校をして長しへに和氣靄々たる平和の園ならしめよ、霸氣稜々たる剛健の地たらしめよ、聞け竜山白水の清響幽韻を、亦是れ諸君が來校を祝せるにあらずや。

嗚呼親愛なる新入生諸君、希くは千萬語盡し難き吾人が意の在る所を察して茲に奮勵一番せられよ。

### ○入學式

九月十二日入學式を雨天体操場に於て舉行せらる、午前八時三十分新入生徒は場の右方に舊生徒は左方に相對して整列し、職員諸氏は壇の左右に列せらる。先づ櫻井校長は起ちて入學式を舉行する旨を告げ新入生徒に對して諄々として訓告せられ又舊生徒に一片の希望を述べらる。

次で新入生吉本寅三郎氏宣誓文を朗讀し高田保馬氏は新生徒總代として校長及舊生徒に對しての挨拶あり、又舊生徒總代として池田總務委員一場の挨拶を述べ。右終りて前學年間皆勤者の姓名を表影し又特待生の選定ありて午前十時に式を終れり。

## ○入寮式

九月二十六日午后一時より雨天体操場に於て新生徒入寮式を舉行せらる、先づ校長の訓辭あり次で奥舎監は習學寮を以て完全なる家庭生活の實を擧ぐべき主旨を以て滔々數千言の大演說あり、次に舊生徒和田正一氏は學寮會規約の綱領を朗讀し福富卯一郎氏は舎監に對し舊生徒總代として挨拶し、又新寮生總代倉岡軍治氏の舎監及舊寮生に對する挨拶、福富氏の新寮生に對する挨拶等ありて茲に此の式をする。

## ○演說部概況

九月二十五日、本學年第一回演說會を瑞邦館に於て開く、三百新來の鳳雛翼を收めて場に在り、時表午後六時三十分を指すや江崎委員は直ちに起ちて壇上に立ち、新部員歡迎の挨拶より本部の目的と希望とを説き、更に斯道研究の機關として別に演說研究會を起すべきを報して下壇す。

## 愛の發展と戰爭 柴 間之祐君

長身爛眼の丈夫は右手卓を壓し壇上に在り。忽ち起る疾風迅雷、天の一方を睥睨しつゝ喝破して曰く號吼怒突歐洲の天地を席捲せし大雄ナポレオンの鴻業偉略、今また何物をか殘せるものぞ、ナザレの聖者は荒野に道を説きて青血十架を染めぬ、而も其の高風遺教は千歳にして益芳を覺ゆるにあらずや、斯くの如きは是れ何の故ぞや、唯一の愛ありしが故のみ、Upon Love 以て基督の流芳あらんも然らざれば奈翁の空圖を見

んのみ、奈翁もと愛なきに非りしもそは個人的なりし、一ジョセフインの愛に過ぎざりしなり、基督の如く Universal なる能はなりしなり、そも愛は人性自然の要求なり、而して西哲の云ひし如く男は大地に立てる櫟の木に似て女は其れに纏へる蔓草の如し、是れ男女自然の性情を説明せるものにして、斯く男子が卓立して力なき者を扶護する如く、博く其の愛を世界の人類の上に施さざるべからず、是れ Universal にして又真正の愛なり。ポーブ曰く passion の愛は動物性のものにして Universal の愛は神聖のものなりと、宜なる哉。而して余はいま戦争は此の Universal Love の發展なりと云はんを、彼の基督を見よマホメットを見よ、彼等は正義人道の爲に、國民福祉の爲めに、其の世を益ふ溢るゝが如き愛の力により、右に筆を執り左に劔を提げて濁悪なる世と戦へり、夫れ人は一人にして生存し得べきものならず國家は實に人類發達の必

然的形成なり、此の發達を助成せん爲めに此の形成を完全ならしめには、戦争は必然避くべからざるものなるを知るべし、嗚呼善の爲めに戦はるる戦争は福ひなるかなと論じ立てて降壇せり。其の高邁の態度、明朗の言語は大に見るべく聞くべかりしも、活氣横溢爲めに緩急度を失し舉手亦未だ神に入らざりき。而も瑞邦館裡劈頭肅殺たる霸氣を横へしの功は大に多するに足る、飛將軍請ふ自愛せよ。

宗教と余が理想せる龍南 平井三男君  
人類發展の歴史を通觀すれば、不平者の聲は常に大なる刺激と奨勵とを與へ居れり。釋迦の如き基督の如き何れも大不平家として遺蹟を千歳に垂れたり。余が茲に叫ばんとする不平は固より前者の如く大ならずと雖も、又新入生諸君の一顧を煩はさんと欲す。余は此の學舎に入りて既に一年、而も其の内容の甚だ外觀と相副はざるを悲む、只見る七百の校生が蠢々として動け

るのみ、龍南の活氣なるもの今果して何處にありや、吾人の先覺は皆て剛毅傑訥を唱へしも是れ徳の小なるものなり、吾人の先づ務むべきは實に精神修養にあり、東洋の風雲急なる今の時に當り、苟も社會の上流に立たざるべからざるもの、最も牢乎たる精神を修養すべきを要す。吾人は今我校活氣に乏しき原因は、徒に試験の桎梏に羈束せられて思を哲學宗教的の方面に馳するもの少きにあらんと思ふ。諸君よ、最も大なる宇宙的の人物となれ。今、人若し人生とは何ぞやとの問を發せば彼は必ず汝は哲學を研究するやとの反問に逢はん、怪しき哉この反問や、凡そ人生は人類としての問題にあらずや、其對象は現世の希望にあらずや、決して哲學者の研究にのみ委すべきものにあらざるなり。然りと雖も吾人は人生の問題に逢看して煩悶死を決せし青年に同情を寄するものにあらず、それ宇宙の解決は即ち我なり、大我の發展にあり自我の

現實にあり彼が此点を思はざりしは大に惜むべく哀しむべし。諸君希くは此信念を以て自我の解決に努めよ、基督の如き釋迦の如き大人格のDeathに接せよ、佛敎の如き決して消極的にあらざるなり。却て武士道は薄弱なるものにして、孔孟の敎に至りては毫も宇宙の真相を審にせず、僅かに天の一字を以てするも竟に曖昧たるを免れざるなりと論し終れり。言ふ所摯實にして柴氏の如き卓發の概なかりしと雖も、而も諄々能く眞意の住る所を領得せしめき。

#### 我國農業經濟の地位 西村事代君

黎南皓齒、愛嬌ある風丰、宛轉たる口調を以て論じけらく。余が今夏歸省の節親しく田夫野人の間に交りて彼等の云ふ所を聞くに何れも書生官吏の生活を羨めるが如し。余其の何故なるやを知らんとし聊か究むる所ありて茲に其の卑見を陳せんとす。古來我國が瑞穂國と稱せられたるは何故ぞ、是れ水田縱横灌漑の利能く及び

て最小の勞より最大の功を收め得たるが故なり、然るに今の農民はこれを忘却せるが如し、夫れ穀産とは申す迄もなく米麥粟稗、而して中に最も多額なるは米なり、最近五年間の統計に依れば一年の産額三万九千石殆んど四万石なり、然るに需要の額は年々四万五千石余なり、是に於てかヤレ唐米とか漢米とかの輸入を見るなり、今一人の所有地二反余として其の一年の收益十三圓六十四錢假に十四圓とするも甚だ憫むべきにあらずや、殊に小作人に至りては吾人は更に一層の同情を表す、蓋し十二圓余の小作料を拂へは剩す所僅かに三圓許のみ、あゝ之をしも憫と云はずんは天下何物か憫れといはざらん。而して斯る窮境に陷れる原因は學術應用の困難なる事、地勢の不定なる事、天候に依頼せる事等その主なるものならん、蓋し我國には大農法行はれずして一般農學的智識の進歩極めて遅く、且つ土地と相手の事なれば水旱虫害あり、加之他

には米商人、肥料商人、普通商人等との關係ありて或は暴利を壟斷せられ、或は相場師の操縦する所となり、或は秋期物價の騰貴するなど頗る經濟的不利の地位にあり。然らば之が救済法は如何、余は之を第一當局者の熱心、第二交通機關の充備、第三教育上の注意、第四農業組合の組織等を以てせんとす。今日農事試験場の報告の如き頗る粗雑なるものにして且つ所謂當局者なるものゝ眼識亦甚だ幼稚なり、且つ試みに小學生徒に向ひ將來の目的を問はゞ軍人政治家等に多くして農業家たらんと欲する者は甚だ少し、斯くの如きは盛に講習會等を開きて農業思想の普及に努めざるべからず、又個人の資力にては以て大計画を爲す能はず故に農業組合は目下の急務なり、嗚呼諸君よ希くは臨機彼等を救へよ、由來我が同胞は義侠の涙に富めりとの一警句を以て結び拍手の間に降壇せり。君が洒をたる口吻は最も這般の説明に適し大に聴者の感興

を惹けり、殊に幾たびか点し來る警拔の漢語、寸鐵能く人の頤を解くの概ありき。

團 結

大井治久君

瑞邦館裡幾たびか怒號喝破せし大井君又更に喝破して曰く世界統一の業は不可能事なれども余は之を喜ぶ、そは國際的競争を有功ならしめんか爲めに團結起るが故なり。今の魯國が發達し來りし徑路を願望せよ、彼れが十三世紀の頃の機運は頗る壯快なるものなりき、而も一度競争の精粹なる戦争の止むに及び、意氣なく活動なき衰態を呈せるにあらすや。凡そ完全なる團結には共同心あるを要す、是れ其の要素なり、而して比較的冷靜なる頭腦を要し、確乎たる主義を要し、又國家の利益と一致することを要す、階級的團體の如きは不可なり、是れ羅馬が衰亡に傾きし原因なり、又宗教的團體の如きも不可なり、歐洲の中原に青血を灑ぎし宗教争亂も之より萌せしにあらすや。次に團體の一員たちんも

のは最も服従を要す、團體の爲めには利己的の小事を捨てよ、而も決して自己の主義を屈する勿れ、凡そ團體の盛衰は一に主領の手腕に依る、而してろが社會に貢獻する所は如何、昔時は刀劍と弓矢とを以て敵の血肉を目的とせしも今は筆と舌とを以て一に平和の爲めに戦へり、且つ間接に人心を警醒し社會に活氣を與ふ、實に團體的競争は國民の惰眠を破る刷新劑なり、英米兩國に於ける現今の政黨軋轢を見よ、如何にぞが人智を増し人心を高尙にすることの大なるや、要するに團體の活動は國家の安寧と民人の幸福とを保障して歴史に活氣と光彩とを賦與し、常に社會の指導者となりて純粹の人物を養成するものなりと喝破して降壇せり、吾人が一昨年の頃始めて君が演説を聞くや其の拮据なる土佐辨と傲岸取つて嚙まんづ身搦へとに畏縮せしが今や言路頗る暢達の域に入り吾人をして其の進境の著しきを想はしむると共に又君が新道に對

する熱心の大ききを感じしめき。

青年論 福富卯一郎君

青年論は余が青年觀なり、凡そ吾人が安心立命の境地は人生神の如きに在り、古人は常に單純に反れど教へき佛教基督教將た儒教を見よ、其の小我を殺せよといひ平等博愛を説き又我老を老として人の老に及ばせど教ふるが如き皆是れ單純に反れどいふにあらずや、思ふに人生の中最も單純なるは小兒の時代なり彼のセドリツクを見よ、彼の眼中には公爵なく靴磨きなし、基督は神の前には平等なりといへり余は當さに小兒の前には平等なりと叫ばんとす、若し世に單純なくは果して如何社會は之を許さざるべしとの聖賢の疑問に對し余は夫れ然り豈に夫れ然らんやを以て答へんとす、夫れ然りとは何ぞや是れ單純を Childish と解し吾人をして葛天民の時代に歸らしめんと試むるが故なり。豈夫れ然らんやとは何ぞや、是れ單純を調和とし一致とし矛盾するなきの謂なり、例へば彼の蒸汽機關の如く常に一定の主義の下に行動せしめんとするなり、而して吾人が庶幾する青年は實に此の意味の青年なり、現今に於て吾人は田舎漢中には是等青年の多きを見る、彼等は情實を知らず、常に心を以て動き目を以て動かざるなり、吾人は八月の太陽誌上に於て快心の文字を得たり曰く「事毎に敢爲勇往の氣風を喪ひ、たゞ圓滑にして老成沈着を装ふは方今の現狀なるに似たり、敢爲にして勇往せんとする思想は、常に老成沈着を装はんとする思想と二者相矛盾せざるを得ず」と一句誠に新平長官の面目躍如たるを覺へしむ、蓋し斯かる矛盾の思想流布して世に眞の青年なからしめたるは社會の罪なり、現内閣が行政整理に行惱めるは其間に幾多の情實の蟠まれるが故なり、而して情實とは要するに單純ならざるの謂なり。吾人は今の青年に古武士の風格を持せよと要するは無理の注文たるを知れども

而も不平を書籍店頭に漏らすか如き意氣地なしを見ては甚だ慊焉たらざるを得ず、凡そ世は法三章的の第一期より現金主義の第二期に移り而して第三期の黄金時代に進むものなり、今や僅かに第三期に入れるが如しと雖も前途甚だ遠遠なるを認む。吾人は茲に努めて眞の意味に於ける單純の青年たることを期せんと論して壇を下る。雜報子思らく君や口を開けば即ち田舎漢を言ふ而して夫子の言動亦多く田舎漢の分子を含む、宜なり君にして始めて此の論ありと。唯其の口調及態度共に亦單純にして風雲を捲如する底の氣焰に乏しかりしを惜むのみ

## 演説の要素

遠山教授

先づ新部員に對して挨拶の辭を述べられて本論に入り曰く、世には演説を以て無用の長物の如く又は單に詭辯を弄するものゝ如く思惟するものあるは誤れるの甚しきものなり、既に人には天與の音聲を有し乍ら之が發表の術を等閑視す

るは何ぞや。或る統計學者は人間一生の發語數は無慮五億を越ゆべしと云ふ、其の發語研究の價値の大なる知るべきなり、余が今舉げんとする演説の三要素は三のMを以て現はすべし、即ち Man, Matter 及び Manner にして換言すれば Personality, Truth 及び Art 是なり、余は先づ Art より説かんに凡そ Science の Art とは平行のものにして前者は Principle を要す而も其の發表は一に Art の力に待たざるべからず、而して此の技術の發達は唯修練を是れ要す、今日名家の成功は何れも訓練勉勵の結果なり、若し運用に熟せずんば如何に微妙の音聲ありと雖も更に價値なかるべし、夫れ文學は最善の思想を最善の式を以て現はし、美術は之を最善の色を以て現はし、音樂は之を最善の音を以て現はすものとすれば演説も亦之を最善の音聲を以て現はすものなりと謂ふべし、泰西には已に演説學として一課をなせり、ピット廿六才にして専門に演



説を研究せり、彼れが成功の大半は其の演説に負ふことあるは諸君が知る所、諸君努めて之が修練を怠る勿れ。次に Master に關して説かん、凡そ人、口を開けば必ず一の Message あることを自覺せよ、Mental transition なる演説にして其の材料曖昧ならんか如何で之を他人に傳ふることを得ん、況んや之を説服し指導することに於ておや、自ら Convince して而して他を Persuade せしめ得べきのみ、今人の通弊は其の Originality を精選せざるになり、諸君は宜しく master せる Truth を傳へ Spiritual reproduction を發言せんことを勉むべし、彼の米國中央集權の力を大ならしめし Webster の大討論が如何に其精神の煥發せるかを見よ、第三 Man に就て述べんに彼の政治屋が法螺を吹き立つる如き、或は一部分の人を暫時瞞着し得んも其の全体の人心を收攬せんとするに於ては蓋し不可能の事なり、若し人を説服し指導せんと欲せば決して煽動家的の

行動あるべからず、誠心誠意能く Personal character を披瀝して聽者の道徳性に訴へざるべからず、我國には能辯家多しと雖も其の誠實なるものは少し、Bacon, Franklin, Washington 等を見よ其の才に於て辯に於て當時彼等の上に在りしものは多々ありしならんも、而も千歳の下尙其の風采を想望せしむること遠く他を凌げる所以のものは蓋し其の人格の特に優越せしが故にあらずや。我が龍南會は獨り技術の練習所にあらず、思想人格の方面に於ける修養も亦大に諸君の猛省を促さんとすと論じて降壇せられたり、流石は演説の御本尊音吐明爽明快にして、抑揚あり變化あり、或は急瀨巖角を嚙むが如く時に緩流柳條を洗ふに似たり、特に振聲一番連發せらるゝ得意の英語は吾人が聽管を refresh するに多大の効果を與へたり。

時尚餘す所ありしかば遠山部長は更に起ちて本日

の演説に就き簡單なる批評を與へらる、曰く、

柴君の演説は活氣溢るゝが如く音吐 articulation にして宛から水雷艇の疾驅するに似たりけり、故に之を戰爭論として聞けば可なりしも愛の發展には相應はしからざりき、平井君のは能く演題に適せりしも音聲に少し苦情あり、即ち今少し reserved power を以てせられたき事なり、聽者をして屢々其の終結ならんと想像せしむるは不可なり。西村君中々上出來なりき、先生此の道には中々詳しき如く能く精密なる統計を點入し且つ折々の漢語等都合よく適し最後の結局など申分なかりし。大井君のも亦た好成績にして言語の articulate なりしが如きは其の進境を示せり、されど語尾を急に止むるは不可、又一体熱情加はれば明晰を欠ぐこと多きを以て能く注意せざるべからず。福富君のもマア出來の方なりき、唯折々頭を斜左の後方に掉らるゝ癖ありしは少しく見苦しかりき。之を要すに演者は常に聽者の感興を妨ぐるか如き舉動あるべからず、故

に舉手巧みならざれば却て全く之をなさざるに若かず、音聲の如きも可成餘裕を存して最後の掉尾に供せざるべからず、Economy of energy も亦演説に於て心得べきことなりと。

これにて全く本會を終りて茶話會に移り談笑歡語に時を移して十時頃散會す。

今夜部長の笑顔を贏ち得しは開會時間の正確なりしことなり吾人は以後も今夜の如くビシ／＼やつてのけられんことを委員に至囑し仕る。

### ○在寮法科生懇話會

十月二日の夜、例の瑞邦館に於て在寮法科生が吹き上げし氣焔は左の如し

生存競争に於ける徳性の價值 篠原悟郎司君

會員諸子に望む 目黒 慎作君

放蝶を吹て曰く 板井賛次郎君

所謂島國根性 黒瀬 弘志君

政客たらんむと欲するものは

議論を盛にすべし

修養の二方面

成功論

國民的修養

修養と人生

岡林 一美君

猪股 勲君

江上 恒之君

江崎 規矩君

後藤 文夫君

## ○弓術部報

○新部員を迎ふ、學年更まりて茲に八十餘名の  
新部員を迎ふ。七旬の休暇荒るゝに任せたる射  
場は、莞茅叢々、庇傾きて月影射朶にかゝる、  
しかも弦音啄々として松林に漏るゝは、新部員  
諸氏の切つて放てる驚の荒矢風を切るにあらず  
や。吾人は實に熱誠を以て諸氏を迎ふ、見よ前  
學年に於ける我弓術部を、師範先輩の懇篤なる  
指導あるに拘らず、毎例會の出席者指を屈して  
數ふるを得べし、嗚呼堂々たる龍南の弓術界、  
未だ嘗てかゝる寂寥を見たる事なし、是に於て

か吾人は新來の諸氏を待つ實に早天に雲霓を望  
むより急なりしなり。今や熱心なる諸氏忠實な  
る部員凡て百三十有七名弓術部の隆盛期して待  
つべきなり。

○新部員に望む、我部毎年多數の新部員を得な  
がら微々振はず、元氣沈淪する久し、是れ部員の  
不熱心によると言へば、復實に斯道の妙味の知  
り難き事其重なる原因なるべし。抑も弓術は禮を  
以て起り禮によりて立つ者にして、不遜驕傲は  
我部大の禁物なり、其的に向つて立つや、衷心一  
つの邪なく一つの煩なく、無我無念、身体の均  
齊と精神微妙の機と相合して始て真に的中する  
もの、吾人の精神も亦此間にありて修養を重ね  
得べきにあらずや、心形の一致と正意誠心とは、  
實に弓術の振本なりとす、徒らに的中を事とし  
心を茲に致さざるは其目的を誤れる者、よしの  
中するもを單に僥倖に過ぎざるなり、かの市井  
巷路に弓を弄する人士は弓術を以て遊戲視する

者豈斯道の大義を解する者あらんや、自ら一つの解知する所なく、遠く一瞥して眞に不活潑なり、無用の長物なりと言ふ、是れ只識者の笑を買ふに過ぎざるなり。囑望す熱誠忠實なる新來の諸氏よ、動かすべからざる規矩準繩を顧み、心靜かに氣平かに、万身の氣息を込めて徐ろに斯道を勵まは味ふべくして見るべからざる幽玄靈妙の域に達する事難きにあらざるべし。

### 第壹學期射初式

朝より晴れやらぬ九月廿六日、定刻に新舊部員合せて二十七名、先づ五色的安土に輝きぬ。

先鋒東師範に續て松本、國武、小田、岩佐の諸氏、引く矢は何れも的の近くに、幾度か觀る人の心を寒からしめぬ、後より立てる諸勇士も遠矢近矢に、的危くを見ぬにける、殿將の生駒師範、狙定めて射られし矢に赤的射落されたり、勇士是に力を得て乙矢に的を破らんと競ふ程に、黒は難なく清岡氏に射貫れつ、二建目の早矢に戸

次氏が青、乙矢にて黒野氏亦に何れも見事命中す。今や只一面の金的光眩く輝けるのみ、何れ劣らぬ勇士の面々、已れ射止めて功名せんとはやれ共、誰一人射落す者もなかりけり、やれ不甲斐なき方々や金の光に目や暈みしか、いざ御覽あれ我矢をど、悠々と出陣ありしを顧れば、是れなん軍中にかくれなき嶋野先生、南無藤崎八幡宮と切つて放せし矢は確かに憂たる響、拍手忽ち起りしがあな不思議、當りの聲はなくして矢は抜き取られぬ、拍手に次で笑聲、的は只僅かに、かすり傷を負ひしのみ。さる程に射ては代り、代りては射る人々の中に、あな耻知らぬ方々や我腕の手並これ見よと瘡大將の太田氏弓弦を切つて放てば誤またず、金的が眞只中鏃も碎けよと貫きぬ、見居る人々、天晴の手際かなど褒めぬ者ぞなかりけり。

終りて分附に移る、五建の矢に尺二の的を蜂の巢のそのの如く貫ける、近頃珍らしき當りなり

。同分競射終りて等を附する事左の如し。

壹等(九分)嶋野先生 貳等(八分)生駒先生  
參等(六分)東 先生 四等(五分)木下先生  
五等(五分)岩 佐 君 六等(五分)大内君  
七等(五分)太田君 八等(四分)戸次君  
九等(四分)富田君 十等(三分)國武君  
士等(三分)佐野君 士等(三分)村川君  
時既に移りぬれば今日の式茲に終りを告げぬ、  
時に五時三十分。

本日の新舊部員の昇級左の如し

(五級) 太田登博 黒瀬祐吉 工藤儀作

右四級に昇級す

(級外) 野田務 富田直光

右四級に編入す

(六級) 戸次末喜

右五級に昇級す

(級外) 大内重美 中島三代彦 井生乙比古

右五級に編入す

(級外) 松本孝二 小田脩 末綱謙 堀親道

緒方里見 進藤澄治 高木善人

右六級に編入す

## ○文科大學より

拜啓學期は改まり學制は一新せられ、それに時候は正に躰をきたい腦を練るに尤も適したる秋季に候へば、諸君には定めて英氣勃々、龍南の新天地に各方面に向つて御活動の御事と獨り不堪羨望候。拙者等去る七月一日を以て辛くも御校卒業、その卒業證書授けられし際は不少愉快又愉快に感ぜられ候。併しそれと同時に一面には恥かしくも心細き念のまづはり起り、自分の如き者でも是からは大學生で、やがては○の如きの肩書を荷負はさるゝに至るのかやとの心配から、就ては肩書の價もこれで大凡そ推測さるゝと思ひなされ候。豫科に在りし頃一日も早く待ちに待つたる四角帽、今は左まで嬉しくもほらくもどうも無之、却て有がた迷惑を感じる場合も往々有之、それで學生としては大學帽を希望に戴いていそしむ君等の豫科時代こそ愉快極まる時代にはあらざるなきと思ひ直さる

程に候。さりながらこれも自分が在京の日尙  
 浅く、従つて面白き娑婆の風に吹かれしことな  
 きにも因らんかと思ひ直して望を未來にかけ向  
 後學問の爲め勉強なし、兎にも角にも愉快に淡  
 白にさう三年間をしてのくる覺悟に御座候間乍  
 憚御放念被下度候。小生は法文科に出席するも  
 のから、サイン、コサインの教室には勿論、その  
 學にも縁遠く、従つて只今申上くる便りの中に  
 も或る諸君には面白くもおかしくもなきかとも  
 有之べしとは万々存居候。大學とは申ものゝ、我  
 文科には尙語學のみ矢鱈に多く、英佛獨文科一  
 年の如き、一週總体で二十五時間中廿一時間は  
 語學で、残り四時間これも英語を以ての哲學の  
 レクチュアに候へば、これらの文科は先づ外國  
 語全盛時代と申すも不可なき位に候。今一例を  
 我英文科にとりて少しく可申上候。

三時間、シエクスピアーのマクベス。これは譯  
 讀と批評、勿論生徒の下調べを要するものにて

夏目先生の輕妙なる講釋も有之、傍聽者無慮二  
 百名。(當分先生よりのレクチュア)  
 三時間、ロイド氏の英文學史講義、こは一二三  
 年合併筆記、先生は天下に珍らしき清朝なる音  
 聲を明確なる發音とを以て、流暢に而かも廣き  
 教室内の一方を睨みつゝ述べらるゝその様、さ  
 ながら文豪の演説をデクテートせらるゝ感致し  
 、イサギ面白く御座候。

三時間、ハミルトン集のスペシャルスタヂー及  
 び日本小説の英譯等、これはロイド先生と吾れ  
 〴〵どの共々の研究に候。

三時間、古文學の研究、チョーサーのカンタベ  
 リーテールス(隨意科)上田敏先生のレクチュ  
 ア。その古文書中にはとても豫科時代には見聞  
 したことのなき文章のみ並べられ、讀み慣るゝ  
 まで中々面白く御座候。例へば Virtue=Verte,  
 Sweet thowers=Soote thowes, the sun=Sonne, Voya-

ge=Vlage, Cut=Cut, Hot=Hoete, Run=ry=ronne

等にて御察し被下度候

三時間、(隨意料) 英語の讀方、これはあながち遠山先生やスウキート先生のキタイ方とは一樣に無之寧ろ詩又は普通文の抑揚に重きを置くものに候。外に作文、會話。

三時間、佛語、英語を以てブツク氏毎朝七時より教授せらる。各部よりの傍聴者、今の所で百名許。時刻に後れ候ものは、戸口の外に押しかけ立聽の姿に候。

三時間、ラテン語、英語を以て癪癪持と見受けらるゝエツク民鍛いに鍛はれ中々有がたく候。  
二時間、獨語、アイヘンドルフを上田先生より。  
一時間、獨語實習。

四時間、ケーベル氏の哲學。

其の外隨意科として主なるものは、東西洋哲學、國語學、言語學、心理學、教育學、宗教學、美學、希臘語、支那語、朝鮮語等。

豫科の間は一も二もなく唯語學と諸先生よ

り否文部省より牛か馬かの様に驅り立てられ、爲めにエチルギーの過半を大學入學前に銷盡し、豫科に榮ゑし春の花も大學にてはその餘香に馨らぬ實例もまゝ見受けられ候へば、体育と元氣の養成こそ反つてブツキッシン、ウラームの諸君には大切かと存候。語學は豫科三年間の教科書中の語を忘れさへせねばやがて一万文字は可有之、參考書急ぎ讀む場にも、さしたる差支は少なかり相に候。

何れの學校にも免れぬ氣取屋は我校の先生間にも生徒間にも少からず見受られ申候。熊本ならば、打つて懲らせの制裁を二三十度も蒙るであらう、風采のコスバきたるも當校にては別段人まり後ろ指さるゝこともなきは、いとニガ／＼しき事に候。

大學の運動は先つテニスと云ふも過言ならず、五高のテニスコートの六七位のものが尙狹隘を告ぐる程に候。擊劍柔道は熊本のを見慣れたる

自分等には何等の感も起らず、唯瑞邦館の六分の一許の道場に師範と十名許の出席者とを見る計に候。凡て大學の運動界は過半一高出身者らしく五高出身者も往々見受けられ申候。

先は右まで申上候早々頓首。(大學院及大學宣誓式の十日前豫山記)

### ○東京醫科大學より

秋冷の候益御健勝御勉學の段奉大賀候。承れば習學寮も新生徒諸君を迎へ、食堂など殊に景氣立ちたる由目出度次第に存候。扱て學事の狀況雜誌へ寄稿せよとの仰に候へ共元來御校の作文科に辛うじて欠点を免れたる位の腕前に付、幾多秀才の妙文を以て充たされたる貴誌へ投稿などは覺束なく候へ共或は參考となる點あるやも不知候條、左に見聞のまゝ只今の狀況御報申上候。

授業は九月十一日より醫科一年のみに正確に開

始致され申候、兼て先輩より其旨承り居候間々トトなども用意せし事とて狼狽も不致候、此學期間は解剖、生理、醫化學、組織の四科目にて、一週僅か二十時間の講義のみに御座候、之迄の様は字書と首引して豫習の必要もなく至て安氣に御座候、併し何れも廿冊宛位の參考書を示され候間、此等を一々參考し居れば到底遊べる沙汰には無之候、參考書は何れも獨乙にて解剖のみ英佛のもの數冊示され申候、生理のみ學校より二三人に一冊宛貸與致候へ共各一部宛位は備へ置くの必要有之候、殊に解剖圖の如きは盲目の杖とも頼むべき者に御座候、高等學校に於て二月三月の頃書店より豫約注文を催促し來る時購求し置けば頗る便利に御座候、一体醫科生は贅澤をせぬでも多額の參考書を要する故つい斯る觀を呈するなりと或先輩の云ひしは尤も存候、解剖は Knochen, Muskel, 大澤博士, Eingeweide を、小金井博士, Gefass u. Nervon を田口博士の担



當の由に候へ共、大澤博士當分福岡へ出張中に候條小金井博士 Knochen より始め申候、先生病を以て命久しからざるべしとの由に候へ共其懇篤且熱心に講義せらるゝは實に感心の外無之候、過る避暑休暇中先生獨り學校に出で書を繕て研究に餘念なかりし由、眞に是れ學に忠實なるものと可申學を以て唯一の慰藉とせられたるものと存候、講義餘り急がず筆記には差支無之候、併し學深き先生の言往々にして淺學の者其意を解するに苦しむと有之候、解剖學上に用ふる詞は皆ラテン語に候處最必要なる者ゝみにて約五千ありとの由一寸荒膽抜かれ申候、高等學校に於て動物學上のラテン語を悉皆記憶し置けば幾分便利に御座候、組織も同博士の担当に御坐候。解剖學教室は新築中にて目下は假教室に候、教場不完全なる上に先生が mikroskopisch の字を書かば少し離れては認むるを得ず大に閉口仕候、之が爲め席取の競争を生し早きは五時頃に行て占

領する由に候、小生は何時も後の方に行てまゝつき居申候。生理は大澤博士の担当に候、講義余り遅からず寧ろ講談的にして其興に心奪はれつゝ筆記を忘るゝこと有之候。

醫化學は隈川博士の担当に候、先生洋行歸りの由にて年末だ老いすカイザー・スタイルの八字髭を貯へ凜たる風丰は自ら其頭腦のクリアなるを示し居候、講義最も急速而も言語明瞭にして秩序整然敢て筆記し難からず眞に之れレクチュアの上乗と申すべきか。

友の曰く一体博士は体骸がよくて眼鏡を用ひず然もコンモンセンスを欠げり、僕も近來大分コンモンセンスがなくなつて來たから不遠博士になるだろ——と先づそんなものかと存候。

### ○京都法科大学より

拜啓青燈相親しむ可き頃と相成申候處、龍南の秋色今如何に候哉。諸彦にも益御健祥にて御勉

勵被遊候段大慶至極に奉存候。偕て本日は御校創立第十三回の紀念日に相當り候へば、例によりて運動會の餘興なほ非常の盛況を極め候ことと遙察仕候。

何なりと大學の事情を知らせよとの御依頼に應じ左にザット小生の感情を申述べ可く候。兎角豫想は事實と相反するものにて、大學は小生に全く反對の事實を提供致し候は猶ほ尋中より高等學校に入りたる時の如くに候。中にも意外なりしは外國法にて外國法兼習と申うせば定めてその名の示す通り日本の法律と同様の研究を致すことと考へ居候が、僅かに外國法的一端を窺ふに過ぎず候。夫れもろの筈にて獨法との他みな一週四時間にて一回生は民法憲法を修得する次第に御坐候。勿論教授の方法は輪講にて二時間五六ページの割に候。併し専門の書籍に止へば餘り六ヶ敷方には無之、試験は唯形式に止まり、卒業前の試験に二問題許りを外國語にて

答へしむる位に候。尤も當大學にて外國法を置ける目的も單に參考書を読み得る丈けの修養を爲さしむるに不過由に候。外國法は英獨佛悉皆有之候へども、教授連の眼中には唯獨法あるのみにて其他は附けたりの有様に御座候。當大學にて法律科(第一、第二試問)を修むるには獨法ならでは埒明かず候。なれども法律を修めて後日實際的方面に手腕を振はんとせば英法に如くものなしと力み返り居る連中も多々有之様に候。今回の當大學法科新入生は計百五十二名、中にも三高と五高とは數に於て第一位を占め各三十二名許に候。

小生の試問にては、外國語は英獨輕重なき姿に候へども諸教授の紹介せらるる參考書は獨語の方多きを占むる様に候。併し經濟事務を取るには英語に如かずとは一般の輿論に御座候。

教科書は

第三(課外二時間) Cunningham Western Civiles

tion, (經濟與正科) が一回生に屬し、Richards essay on Currency and Finance (課外) が三回生に屬し、ロッシユルの經濟原論(獨語課外) が二回生し居り候。是等は悉皆出席致し候ても、時間上はさ制度上毫も差支無之候。其他の試問の外國法は

### 第一、(法律)

{ Pandekten, (Denburg),  
Staatsrecht, (Meger)

{ Torts (Underhill)  
Contract, (Anson)

### 第三、(行政)

{ Staatsrecht, (Neger)  
Law of Constitution, (Dicey)

當大學の宣誓式は去月十四日に舉行致され、式場にて木下總長の二時間に亘る演説有之候。総長は風采甚だ揚らず、辨舌また甚だ巧ならざるも、其熱心なる語調と明晰なる論旨とは少なからざる印象を與へ候。その論する所を聞けば佛國巴里に研讀の功を積まれたる博士その人より

も、寧ろ往昔熊本時習館に遊ばれたる當年の先生に接するの想あり、何とく朱子學派の口吻を覺え候。

各教授の開講は宣誓式の翌十五日よりの規定に候ひしも正式の講演は本月より開かれ候。聽講の日尙は淺く、諸教授の性格も未だ全く窺ふを得ず候へども、左に講坐に於ける諸教授の態度風姿、及び講演の概畧を申述ぶ可く候。

經濟原論(田島氏) 諧謔を以て講義を貫徹さるゝも其間自ら一條の大系整然として亂れざるの妙趣眞に敎校の獨壇に御坐候。在東京知友よりの來信によれば金井氏のも同様に候由且つ田尻氏の講義も諧謔に富めりしを見れば、由來諧謔即氣焔なるものは經濟學者處世の慣用手段に候はむ乎。

民法物權(岡松氏) 氏は世已に定論あり、亦暇々するの要無之候へども、其の風采の漂乎として犯す可からざる、眞個に當大學の好教授に御

坐候。氏の講壇に立つや、講坐の四隅を睥睨して自ら學生の注意を惹かしむ。其の講述は語句明晰、論理整然、毫も推論にヌカリなき處、明徹なる頭腦を有するにあらずむは到底能くせずと被存候。

憲法及び國法(井上氏) 氏の思想及び風姿は其の容態之を示して餘りあり候。氏が肥滿せる體軀を運んで講坐に臨むや、恰も慈父に接するの思被爲候。その講述は老練穩當、筆記も到つて緩なれども、貳時間内に寫し得たるところ、他教授に比して最も多量に御坐候。同教授の國法學は東京にて一木、末岡二教授が各國憲法の大要を形式法律學の方面より比較説明するに過ぎざると大に其趣を異にし、國家に關する法的現象を心理的及び物理的方面より觀察せられ、憲法の實質を Systematic に講究せらるゝは慥かに教授の特色に候

民法總則(岡村氏) 氏は大學を出でられしより

年を關すること淺く、從つて造詣する所いまだ甚だ深からざるも、自分獨創の見解を開かんと力めらるゝ所は、さすがに年壯血氣なる學者の本領と申す可く候。風采また端正、頗る溫雅秀麗の風あり。その講義は初めに大體の條系を講じて、後に之が解釋を下さるゝ順序に候。かくては忘却の恐あるも、由來大學にて記誦する所は如何に記憶に達者なるものと雖も、卒業後數年を出でずして忘失すること一般なれば、無理に注入するには及ばず忘るべきはドシ／＼忘れ、一方に於て、は自勵的に頭腦を練磨すること肝要なりとは、氏が講義の始めに注意せらるゝ處に御坐候。

刑法(勝本氏) 風采揚らず。軀軀矮小なるも、其の氣力に富める、向上的精神の旺盛なる、學者として活氣あるは岡松氏と相譲らず候。該教授が刑法基本論に於て古今諸大家の學說を罵倒し、終りに自己の斷定を下さるゝ處、卓厲風發眞

に風雲を叱咤するの概なきに非ず候。されど教授が自身の所説を駁撃し、その欠點を指摘し、かるが故に刑法學の一大改革を企行せざる可らずと言はるゝに至つて、聽講者をして學說上の取捨に迷はしめ、多少の批難を免れず候へども、由來世には絶對の眞理なし。特に形而上の學は物理化學の如く實驗の得て徹證すべきにあらざるが故に、諸大家の説と雖、強ちに之を眞理として遵奉すべき理由なし。誰やらが徒らに諸大家の學說に盲從するは法學研究の一大障礙なりと言ひし如く、學生をして諸説を咀嚼し參照し以て自問自答せしむるの習慣を養成するは實に講師の責任かと存候。

經濟史(小川氏) 本年東京大學を卒業されたるのみにて他教授に比して何處やらに稚氣を存し候。その風采の悠揚として貴公子然たるに似ず、講議の語調は明晰簡要前途有望に御坐候。氏の經濟史の教授法は前述の教科書中の要點に付き

て學生に質問せらるゝ事と相成申候。蓋し參考書の要點を通讀了解するの修練は極めて肝要なる事に御坐候。

時效(伴氏) 一度講議有之候へども欠席の爲め未だ何とも申上兼ね候。

右は當大學法科大學第二第四部課業教授法の大略に候がその記述は全く小生の獨斷的見解に出でたるものにて誤謬の點不穩當の點も有之可く左様御承知被下度候。

當地は古帝京の地とて歴史上の古跡に富めるは申す迄もなく、實に山水明媚の樂園に候へば日曜などには鈴を曳きて秋色を探るもの極めて多く候。秋風一過、行く處として可ならざるはなく、山川草木に至るまで何となく歴史的紀念を存するやうに思はれ、眞に歴史的の一大パノラマを見るの心地せられ候も小生一人のみには有之間敷候。なほ京都の名勝に就きては申上度き事も多く有之候へどもまづ之にて擲筆、終りに

臨んで諸兄の清康を祈り候不宣。

### ○龍南だよ

機關としての本誌、學風振作の方便としての本誌が、あまりに部報、寮報を疎外して寧ろ彫蟲の技に偏せるやの觀あるは雜報子の心外とする所也。因つて茲に、など云ふ大抱負を以て物するにも候はねど、事多き刻下の龍南は通報すべき多くを有し居候。目睹耳聞のまに／＼筆に任せて通報致すべく候。勿論異郷の學友をして麻姑搔痒の思あらしめむ、などとは以ての外、そが全然蛇足に終る事なくば幸甚とする所に候。

It gains as it goes on. は革新の常習とはよく穿ちたる言とや申さむ。二年以前の學寮組織の變革は、當時の雜報子が大革新の真相云々の文字をなして、多少注意を惹き起したる者にて候ひき。然るにその効果が果して十二分に認められしやは、未だ疑問に屬すべきに重ねて組織の變

革を見るに至候。這間には何等かの消息の潜在しつゝあるには非ざるか。揣摩も臆測も斯る時には、思ひ／＼になさるゝ者にて、免角興味ある者には候はずや。この新組織の結果として顯はるゝ事實は次の如くに候。

室員は全然新人生のみを以つて組織され、各室員七名なること(一)。舊生の殘留するものは南北寮各一室、新寮二室、各委員室員合計三十五六名なると(二)。而もこの少數の舊生徒は、新生徒と同一の取扱に甘んずてふ口約の上、舍監の許を得て在寮を得しものに候。かくて昔ながらのものは自炊制度、形ばかりの學寮會、及び食堂の臭氣、立山が禿頭は勿論の事に有之候(三)に對する舍監の理由とする所は次の如くに候。元來學寮は新生徒をして、一年間規律的に起臥せしめ、品性の陶冶、軀軀の強壯を得せしむるにあり。然るに從來の状態に鑑みれば、學年當初の人員は學年末に至りて、減じて三分の

二となる。これ室の狹隘にして勉強に適せざるによる。如かず、室員を減じて能ふ丈け修學の便宜を與へ、彼等をして終迄寮に留まらしむるの策に出づるには、又從來の室長制度は、その効果甚だ舉らず。寧ろ學寮が歴史的に有する弊風を遺傳せしむるものなりと認む。因つて是を廢せりと。(二)に對する舍監の理由とする所は、要するに舊生徒をして多くの室を占有せしめたるが故に、舊生徒を容るゝに足る丈の充分なる餘地なきこと。

雜報子が如何に禿筆を呵して彌次騒ぎを致候とも、今更變更のなさるべきとも有之間敷、評議員會も議決を撤回して、鼎の輕重を問はるゝが如き愚に出でざるべきは萬々に候へば、批評などは眞平御免に候。而し蜚語の紛々は、當分避け難きに候はむか。舍監は寮生の自治呼ばはり手摺り、舊生を拂ひてゐるの聲を息めんとするど出づるなり。二年前の改革に舊生徒の數を減

するの策に出で、這度の改革に更にその多數を去らしめしは、その意の存する所を見るべし。霜を踏んで堅氷に至る、吾曹の大に驚戒すべき所などは、寧ろ愛嬌ある揣摩には候はずや。而し中には随分高く止まりし連中も候へば、舍監が寮も、ちや、ぐ、くも久しき者なり。天下を治むるは小辭を煮るが如しと、一番警告致さむかなども耳に挿み候。然るに寮を以て學風の中心なりと信じ。従つて寮中に學風に感染すること尤も深き者、及び雜多の分子を混同し所謂龍南の學風が漸次破壊されつゝありと觀するものに取りては、這回の改革を是なりとせざるは勿論のこと候。

序なれば、編纂だよりも物し候はむか。西風秋來の韻を將て至り、星夜の蟲聲も亦いたく人の詩情を動かすものあり。加ふるに七句の休暇は吾人に對して少なからざる蘊蓄、修養の時を供

し候へば、這回の誌上には必ずや、廣搜の辭、博羅の辨、大に見るべきものあるべしと豫想致し居りし次第に候然るに豫想程當にならぬものは無之、依然として秋風落寞の思を致させ候。辯士募集、原稿募集などには何時もながら秋高馬肥の文字を見れども、兎角高からぬものは意氣にて枯れたものは思想に候。殊に二三部生が文筆に縁遠きは、寧ろ一種の歴史的習慣にはあらずやとまでに訝まれ候。偶々、演說文章の士をろの中より出す時は、人は之を目するに異例を以てする有様に候。何も雜誌と演壇とが一部生の専有には有間敷、多くの人はサインコサインもて練り上げし組織的頭腦より出づる健實なる辯論に對して、疎放氣取りの一部生の所說に對するよりも、一層の熱心を以て傾聽すべしと存居候。

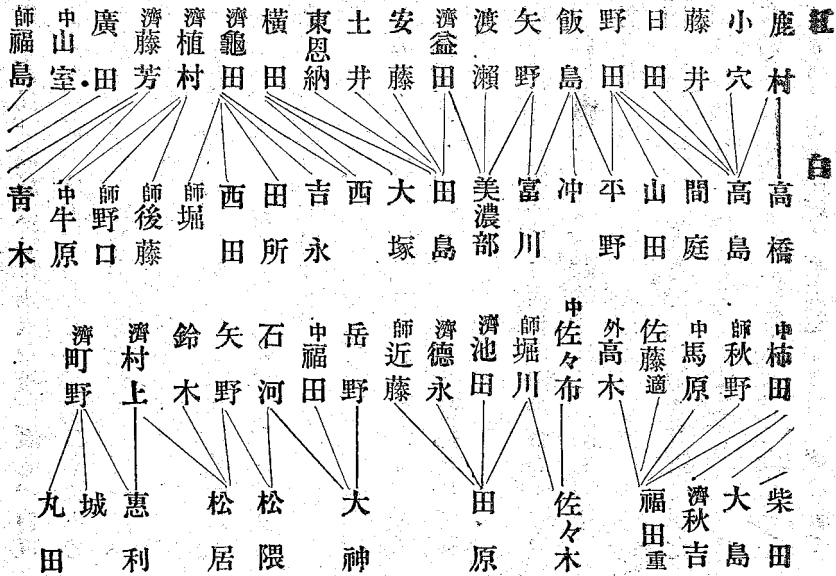
而しかく申せばとて、一部生以外のものはろの

頭腦が全然乾燥せりとは申さず候。既に紫溟吟社の驍將には幾多の二三部生を有せりとのこと候。而し這種の人に對して望む所は、何ぞ千頭一步を進め縦横博証して、大に長文字を成すを勤めざるやに有之候。通信も飛んだ處に迷ひ込み候へば、是にて擱筆致候。

### ○柔道春季紅白大勝負

落花流水と共に逝いて、春光漸く老いんとする時、我部はこゝに五月十六日を卜して、卒業生の豫餞をかね、師範學校、濟々蠻、熊本中學の精銳を招待して、春季紅白大勝負を舉行しぬ來賓としては井芹濟々校長、櫻井校長、會田、兒島、遠藤、諸教授の臨まるゝありて、近來稀なる盛會なりき、例により左に勝負の妄評を試みんか。





鹿村—高橋。今日の戦の先鋒は静々として見られぬ、鹿村は体に於て既に高橋に優る、技未だ熟せざれども、而かも新進熱心の士、高橋もよく支へしが遂に膝車にて敗をとる。

鹿村—高島。高島は体は小なれども取口落ちつきて腰に力あり曾て少しは素養ありしものと思はる鹿村は足拂にて倒されたり。

小穴—高島。小穴も熱心家の一人取口鷹揚なるは日尙淺きが爲か高島の巴投に宙に飛しは残念藤井—高島。藤井は軀幹小なれど業士にて体のかへし輕し暫時か程は揉み合ひしが高島は又も巴投にて。

日田—高島。味方の軍三人までも倒されてあな憎ツくやなど口には言はねど溢れんばかりの勇氣を振つて見はれたるは紅軍方の大男日田とぞ知られける、高島は何かとばかり取つてかゝり折を見て又もや巴投あはれ大の男は、高島は茲に其の功により三ッ巴の紋をぞ頂戴しける。

野田―高島。高島は已に四人を投げ倒し、白軍いよ／＼景氣づけり、いでこの怨報ひくれんと振ひ起ちしは紅軍の野田、牀肥大にして一見方よく鼎を扛げんと思はる、短倭の高島争で敵すべき、加ふるに數度の戦に力つきて、新手の鋭鋒を支へかね、腰投一本、あはれ、白軍の勇士は敢なく戦場の露と消ぬぬ。

野田―間庭、間庭は小兵を以て、評判高き男、体のこなし甘く、業も可なりあれど、かゝる剛の者に向つては施すべきすべなく、釣込足にて敗らる。

野田―山田。二田の争、何れの田か勝つかと見て居れば野田は又もや釣込足にて山田を倒せしぞ勇まし。

野田―平野。已に三人まで倒したる紅軍の勇士野田は、氣益昇つて牛をも呑まんとする有様、さきに高島に蹂躪せられし紅軍も、茲に漸く勢を得てけり。白の平野も筋肉逞しき男、体に於て

は野田と伯仲す、双方業は派手ならざるも、力の入りたる勝負、數合の揉合、熊鷹の荒るゝさまにも似たり、さはれ野田は數度の合戦に勞れたりけん、平野の首べに、はかなく命を隕しぬ。飯島―平野。清楚たる風丰、芙蓉の高く水を抜くが如き美丈夫、これぞ紅軍にかくれもなき飯島とぞ知られる、曾ては繪津湖上に腕を鍛ひ、今や瑞邦館裡日々体を練る、新進の氣盛なるものあり、早速得意の十文字絞にて、平野を倒しぬ。

飯島―沖、沖も飯島に劣らぬ体格、飯島は思ひきりたる業、度々かけしも、未だ十分ならざりしが、最後の横車は見事功を奏して、ドットばかりに沖を倒しぬ。

飯島―富川、富川は近來こそあまり稽古着を着ざりつれ、一度は昔し鍛つた男、敵も物かはさずいはんす勢に、初陣に二つまで首を取りてはや疲かれたる飯嶋は、敵の横車に敢なき最後をぞ

遂げにける。

矢野―富川。矢野は体はあまり大ならざれども軽く動きて天晴の業士、富川が折見てかけし大外刈、ツ―はゆかじと、返せしは御手柄。

矢野―美濃部。美濃部は道場にては、あまり其影を見ざれど、相撲どきては學寮の評判男、仁王立に立ちたる様は流石に落ちつきたるものなり、業士の矢野も施すべき術やなかりけん遂に絞にて首をぞ取られける。

渡瀬―美濃部。渡瀬は天晴れの好丈夫、業もあり力もあり、近來大に進歩の跡ありこの評判、されど敵は名だる剛の者、孟賁の勇を振うてかゝれはせんかたなく遂に壓へ込まれ、幾度か起きんどもがけどイツカナ大磨石、崩裂装にて固められ、一秒、二秒、……遂に十秒、あゝ渡瀬の水は涸れにけり。

益田―美濃部。濟々鬘先鋒の士益田は現はれぬ、「紅ッ」、「白ッ」の聲一時に湧きぬ、益田も美濃

部に伯仲する剛大なる体、敵の稍疲れし隙を見つけてかけし体落は、見事効を奏しぬ。

益田―田島。仁王の如く衝き立ちたる荒武者、これなん白軍の剛の者、田島とぞ呼はつたる、敵の益田もさるもの、目にもの見せて呉れんと打ち込む大外刈を田島は見事に返へしての勝。

安藤―田島。安藤も斯道の熱心家、近來稍其の技も上れり、されど敵の剛力には及も向けかたゝく大外刈になき倒されしは残念。

土井―田島。土井は中々の巧者もの、腰をきり下げての落ちつきたる取り方、遂に池中のものにあらじ、暫時か程は揉み合ひしが田島の釣込足にて無残や倒れけり。

東恩納―田島。ヤア我こそは鎮西八郎爲朝九代の後胤、琉球の住人東恩納なりと呼はつたる、矢晴れの武者振、田島は數度の合戦に疲れたれど流石は昔鍛ひし腕前、揉みつ揉まれつする程に、東恩納ははや敵の装束固にかゝつて首をぞ

かされける、田島は都合四つの首を得て白軍の喝采しはしはやまざりき。

横田―田島。横田は新進氣鋭の士、奮闘縦横せし白軍の豪勇を見事大外刈に刈り倒したり。

横田―大塚。横田は倍せる勇氣にて、敵の大兵を又もや大外刈にて、

横田―西。体格に於ては双方優劣なき位、西は中々巧者の取口、横田は西の釣込足に釣り込まれて遂に負。

龜田―西。龜田は濟々鬢白眉の士、小柄なれども天晴れの業士、体の働き一點の申分なし、脊負投にて見事西を。

龜田―吉永。吉永は近來なか／＼の熱心、靜かに体をかまへたる様落ちつき拂つたものなり、龜田は敵体を崩して跳腰一本、見事に參らせた。

龜田―田所。ボートのチャンで名高き紅の田所、柔道もまた非常なる熱心、近來進歩の跡歴々

たるものあり、敵の早わざを左に右に巧みに受け流せしが、龜田はこゝぞと憤發、手早く体をさつて巴に返へせば、流石の田所も宙に飛びぬ。

龜田―西田。「紅ッ」「紅ッ」、紅旗復翻へらんとし龜田は勢益昇る、之に對して立つたる大の男は紅軍の西田、龜田も辟易せしが流石は巧者な業士、乗かゝらんとする敵の躰を、恰もよしとひつ担いで脊負投一本は天晴の業。

龜田―堀。やがて靜に見はれたるは、師範校の先鋒堀とぞ名乗つたる、双方共見事の業、輕く素早く立ち働くさま飛鳥の如し、龜田は已に四人の首を斬りたれば、力漸やく衰へたりけん、堀に組まれて、あはや首をかき斬られんとする刹那、ムクヅと跳ね起き、又もや火花を散らして戦ふこと數合、いつか勝負も見えざれば、後日を期して別れけり。

植村―後藤。寸分違ひなき体格、おとなしき取

口、案に於ても非難なし、体落にて後藤の負。

植村―野口。味方の軍兵倒されたるは残念至極と飛ひかゝれど、敵もさるもの客易に手を出さず、互に防禦の体となりて、活潑なる業も出でざりしが、遂に野口は崩裂装にて仆れけり。

植村―牛原、此日中學方の先鋒、其名もイサギヨキ牛原、剛力無双の勇士、植村も三人目の敵なれば体の疲弊や覺ゆけん、牛原が打ち込んだる足業に、脆くも首を渡しけり。

藤芳―牛原。藤芳は天晴の業士、縦横左右にきり廻はせしも、敵の剛力に返されがちにて、せんすべもなかりしが、仆れんとして、敵の襟元取つたる早業に、牛原は無残や露と消ゆぬ。

藤芳―青木。出づるとすぐ、藤芳の体落にかゝりしは残念。

藤芳―柴田。柴田は小兵なれどもなか／＼食へぬ業士、双方共業はよく出しも、モ少しと思ふ處多かりき、柴田は概して受太刀、日頃の利業

も出でかね、遂に續りに敗れしはのこり多かりき、

藤芳―大島。藤芳は已に三人までも首打ちとり、いでや味方に参りて、功名話せんものをと、やをら起たんとする時しもあれや、春海と名つけたる筑前駒太く逞しきに、金覆輪の鞍置いて跨りたる天晴やさしき年若の武士、「戦は今日が始めてなり」といふやうなる顔付きなれど、斯道に於ては中々の達者、利業体落見事に、熊谷ならぬ藤芳は、ドットばかりに仆れ伏しければ。敵も味方も大喝采、暫時か程いやまざりたる。

廣田―大嶋。あな美しの敵かな、いでや生捕にせんすど取つてかゝる紅軍の廣田、腰を引いてツツバル處、流石は相撲の名人だけあり、大島が例の左腕、危き處までゆけど、なか／＼かゝらざりしが、こゝぞと思ひきつたる最後の背負投に、廣田は仆れて疊を負ひぬ。

山室―大島。山室は六尺優かの大男、南蠻鐵の

如き大脛上げて見事なる大外刈に、あはれ、花は散りて清き流れに浮ひぬ。

山室―秋吉。双方雲衝くばかりのチャイヤント、ローマのグラディエーターもかくやと思はれぬ、機敏なる取口なれど、業よりも力の方優れり、苦闘七分かくては果しもつきざれば、また逢はん日を契りて、西と東に。

福島―福田。福島は美髯の好丈夫、福田は肥大の好漢、何れの方に福の神が落つるやら、暫時互に顔を見合はせしが、やをら取りかゝりて、數度の合戦、福田の体落は功を奏しぬ。

柿田―福田。柿田はさうなく手を下さず、福田も攻めあぐみしがイヨツの掛聲と共に大腰にて見事一本。

秋野―福田。秋野は福田よりも稍大、体の少しるれる所をつけ入られ、見事足拂にて拂ひ仆されぬ。

馬原―福田。相手は熊本中學にて鏑々たる重鎮

其名も捕つて嚙まんず馬原、福田は勝ち誇りたる勇氣を振ひて、眼光一閃、飛ひかゝりし馬原を美事体落にて、薙ぎ仆しぬ。

佐藤―福田。佐藤も斯道の老練家なれど銳氣溢るゝ福田に敵しがたく、二三合の後敢なく足拂にて拂ひ仆されぬ、福田の意氣益振ふ。

高木―福田。味方の勇士五人も仆せしはニツクキ敵の振舞ひかな、この仇報いで置くべきかと、驀地にかへ來りたるは大兵の高木、体は其名に稱ひて飽くまで高く、猛虎の如く攻めかくれどイツカナ福田は仆れず、一上二下、左馳右突、闘ふこと十一分、引分かと思はれしに不圖又イヨツのかけ聲と共に、立派なる福田の浮落に流石の高木も參つたり、あゝ福田が今日の働は永く青史に輝かなん、盛なるかな。

佐々布―福田。大江の澎湃として流るゝを、堰き止むべく立ちたるは紅の佐々布、われこの奔流を防がずんばこの紅軍を奈何にせんと、猛然

として起ちでし体も丈夫、業も達者、福田は組まれて起さんとする所を美事裏投にて。あはれ六人まで打ちとりし白軍の勇士は、天か命か、又折れ力盡き、蝟の如く矢を被りて遂に腹をぞ切りにける。

頓て左の各流形の仕合あり。

肥後流形 (永野金十郎氏  
神江恒雄氏)

竹内流形 (村上邦夫氏  
從永徳雄氏)

扱心流形 (町野晋吉氏  
龜田清五郎氏)

講道館 (戸張師範  
流形 高木律氏)

佐々布―佐々木。佐々布と佐々木、双方共に苗字も長いが体も長し、相對して破顔一笑せしは兼ねてよりの知己にや、双方共防禦的の体をとりてなかく、投げやすくもあらず、身を捨てゝ侵入する業なければ後は互にツツバリとなりて、引分の命下らんとせし刹那足拂にて佐々木の

勝。

堀川―佐々木。苦闘數合、堀川の大腰は御手柄あはれや、佐々木は遂に堀川に流れて復歸へらずなりぬ。

堀川―田原田。原は福岡出の業士、近來意氣甚だ盛なり、例の鈎込腰は美事、堀川の水は瘦せにけり、

池田―田原。双方共申分なき体格、或は高く或は低く飛鳥の業を盡して戦ひしが、田原の裏投功を奏して勝。

徳永―田原。濟々鬘に其人ありと知られたる徳永は現はれぬ、「紅ッ」「紅ッ」の聲援頓に高まりぬ、白軍も負けじと、「白ッ」「白ッ」双方名代の業士なれば縦横無盡に切廻はせしが、又もや田原の利業鈎込腰に、無殘や徳永は敗れにけり。

近藤―田原。近藤は師範校の勇鎮、体も大く業も立派、獅子の如く虎の如く奮ひかゝる、田原

も數度の合戦に深手を被むれど流石は鍛つた体、右に受け左に支へ、倒れつ起きつ、折しもあれや吹き下す風一陣、峯の風のふれならで、引分の命。

岳野―大神。岳野は大村で昔鍛つた天晴なる腕前、業の奇麗にして少しも無理のなきは優に同輩を抜く、大神も福岡天真館出身の勇士、岳野が軽く早くかくる足拂は風の柳を拂ふ如く、大神が得手の大腰、切り込むその早さ、蝴蝶の花に戯むるゝにも似たり、虚々實々、秘術を盡して戦へば、敵も味方も舌を巻いてぞ見入つたる、大神は岳野の足拂に、幾度か味方のものに冷汗握らせしが、未だ運やつきざりけん、大外刈にて大の男を薙ぎ倒しぬ、得意想ふべし。

福田―大神。福田は熊本中學の勇士、さうなく渡らず、岩の如くツツバれば、派手なる大神の大腰も遂に疝癰腰となりしが、憤激一番、こゝぞど切り込む大腰一本見事、大神益々氣焔。

石河―大神。石河は評判の寢業の名人、飛鳥の如く跳ひつくさまに敵と諸倒れ、車の如く廻はりしが、石より堅き石河の絞は遂に大神が死刑の宣告とぞなりにける。

石河―松隈。石河は又もや得意の寢業にて敵の陣を敗らんとせしも、相手もさるもの、立ちあがりて投げんと争ふ、ほどもなく松隈が得意の脊負投げ見事にきまり、無殘や石河は宙に翻りぬ、

矢野―松隈。此の日紅軍方の老武者矢野は、今日を限りの帶引き締めつお得意の腰を入れんとすれば、松隈さはさせじとすらり／＼と体をかはす、いと目覺まし、暫時揉み合ふ程に、あはれや松隈は組み伏せられ、絞にて首をぞかくれる。

矢野―松居。こゝにまた松居甚之丞と名乗つたる白軍の剛の者、靜に馬を陣頭に進め、いかに敵の侍大將、先度の耻辱雪がんづ、いざ見參せ



んと斬つてかゝる。矢野は小氣味よき敵かな。  
いで物見せて呉れんすと渡り合ひしが、事面倒  
なりと突き入る腰車、ドッコイろうはと素早く  
きつて脱けたる松居が手なみ、矢野は攻めかけ  
／＼突きよすれば、恰もよし体の少し前傾きな  
るを機として松居は一流の巴投、味方の軍は疊  
を敲いて、したりや／＼と離しけり。

鈴木—松居。日頃鍛つたる腕の力試めさんもの  
をと、はやり／＼りし紅軍の勇士鈴木は驀地  
に馳せ来る、松居サア来いと立ち向へば鈴木や  
れ小癩など受けながす、松居は巴をかけんとす  
れば、鈴木は脊負を試みむとし、一上一下、火  
花を散らして戦へば、兩軍鳴を静めて見入りた  
り、かくては勝敗も果てざれば、鈴木何條事か  
あらむ、一氣に打ち伏せんと、金剛力を振つて  
脊負投をかければ松居は素早く腰をきり下げ  
、ウントばかりに裏返しに返し倒しぬ。

村上—松居。松居今は深手淺手の數知れざれど

、さて、此の時、紅軍の總大將町野は、副將村  
上をま近かに呼ひて旨含ますれば村上申すやう  
「成敗利鈍は逆め期すべからざれども、命のあ  
らん限りは戦ひ候はん」と猛然として立ち出づ  
れば、天地をつゝむ雲慘憺、松居小手を翳して  
よく見れば、これぞ今日の紅軍の副將濟々鬢に  
て其の名も轟く村上邦夫なり、こはよき敵かな  
、打ちとつて手柄せんものをと攻め立つれば、  
敵もさるもの蝙蝠の如く身を返はし、暫時勝負  
も見えざりしがあな無殘、松居は村上に組みし  
かれ、岩の如くに壓へられたれば、これを限り  
と潔よく腹をぞ屠りける。

村上—惠利。「敵を討つ龍田の川の紅葉かな」今  
日は近頃珍らしき戦に逢ひつるよ、いでやこの  
副大將生捕つて功名手柄せんものと、立ち出で  
たるは白軍の傑士惠利筑前守其人と知られたり  
、村上もイデヤとばかり眼に注ぐ決死の色すさ

まじ、惠利は返し名人、自護躰堅く固めて岩の如くツ、立てば、いかな業士の村上も得意の左をとることかなはず、二三合夜叉の狂ふが如く攻めかかりしも、剛力無双の惠利は少しもひるまず、暇とりては事面倒と、機を見て切り出す石火の足車に、さしもの村上もドットばかりに投げ倒されぬ。紅白の兩軍、此勝負こそ此日の見物なれど、手に汗して見てありしが、見事勝つたる惠利が武者振、天晴勇ましかりと稱へぬもゆぞなかりける、

町野―惠利。紅軍の總大勝町野晋吉は今や采を執て陣頭に立ち出で疾風の如く突いてかゝる惠利が鎗先を、心得たりと二三度受け流せば、惠利は逸りに逸り敵城を抜くは此一舉にありと思ひ切つて突ツかゝる途端、思はずも足すべらしければ町野は得たりとムンツと組み付き上を下へと揉み合ふ程に、惠利は金剛力を振ひてウンとばかりに身を起こせしが、そこを待つてかけ

し町野のスクヒ美事、惠利は思はぬ敗を取りにけり。

町野―城。ここに、白軍の副將城隆之助は、味方の勇士が討たれしに氣をいらだち、丸田將軍に申しけるは、「あはれ今敵の總大將と引組んで、手痛き戦仕るべし、万一某打れたらんには弔ひ合戦頼みまつる」、大將聞かせられ「よくも申しつるかな、さうく敵の本陣を衝き崩されよ」と勵ましかれば、城は腹帶キツト結び締め面もふらす突いて入る、町野も今は味方の運命一身にあることなれば、さうなく渡らず落ち附いてかまへたり、城は幾度か得意の脊負投に敵膽を寒からしめしが町野も巧みにはづし、城かよろめく處を早速に組み伏せて首を掻き斬らんとせしかば、城は死力を振つてムンツとはね除け飛び起きらんとせしが、ねばり強き町野は何處までも逃かさじものと犇々と組み付くに流石の城も今は力つき果てせんすべもなく、無念なが

らも四方固に固められて、萬事休しぬ。

町野・丸田。味方の勇士、枕をならべて討死しければ白軍の大將丸田肥前守は、殊の外安からを思ひ氣もいら立ち、憤然席を蹴て起ち出で、大將駒の逞ましげなるに打乗りて大身の鎗をひきしこぎ、岩をも貫かんばかりに突き入る、町野心得たりとひらりと体を返せば丸田このがさじと攻めかゝる、敵も味方も今日の勝敗この一陣にありと片唾をのんで見入ったり、丸田は得意の大外刈にて刈り倒さんどあせり、町野は横捨身にて投げ捨てんといらだつ、さはれ流石に大將同士の、仕合とて双方共重く構ふれば勝負も稍久しく亘りて容易に決せず、互に玉なす汗を絞つてこゝを先途と防ぎ戦ひしが、かくて勝負も果てざれば、復逢はん日をと契きりつ互に駒を返へしければ、敵も呼方も箠を敲いてしなりやしたりと囃しけり、

後は例によりて茶菓の饗、せんべい噺ちりなが

ら今日の手柄話に虹の如き氣焔を吐きて散會せしは六時頃なりき。

當日昇級を行ふ、即ち左の如し。

佐伯藤三郎 松居甚一郎 鈴木安一

右二級乙へ

岳野忠一

右三級甲へ

福田重義

右三級乙へ

藤澤幹二 赤峰義幸 黒瀬弘志 西田五郎

右四級乙へ

横田文吉 渡瀬正磨 土居 寛申 西 浩

安藤 薫 飯島庸徳 野村菊之助 小田脩

小穴宗次 大塚熊一

右五級甲へ

(委員投)

## ○擊劍部春期大會記事

五月十七日、雨天体操場に於て二百の健兒が竹

刀を揮て雌雄を決したる、我部春季大會の概略を記さむ。

今永―猪股 拍手喝采の中に顯はれ出でたるは今永に猪股、何れも未だ初心の若武者と見受けらしが、猪股の濟ましきつたる舉作は、遂に今日初陣の勝を制しぬ。

福田―永原 つと陣頭に顯はれし縦横可なりの男は之れ福田なり。又の一人は柳生の流れの末汲みし小兵にて、昔取りし角力の腕を扼して打て出でしが、如何にしけむ、小手と面にて脆くも敗北。

磯野―増水 立ち向ふや、磯野「面―」審判官「面取ります」、又同じ所を撃たれし増水は怨を呑むで倒れ伏す。

鍋島―藤谷 鍋島の勝ち。

神保―水上 何れも丈高からず低からざる對の者、日頃鍛ひし腕の力、今日こそと勇んで見はし水上は、巻き打ち小手を二つ迄撃て凱旋

す。

高橋―城 獅子奮迅の争ひは一種の光彩を放ちしも、「イヤ」と云ふばかり撃て、勝間あげし城の誇顔も、随分の見物なりき。

伊藤―永松 合ひつ、離れつ、打ち合うこと暫時にして、双方疲色見ゆしが、伊藤の胴に對する永松の小手と面にて勝負は極まれり。間庭―大植 小兵渾身是氣と云はう様な間庭と、まだうら若き大植とは、少し不似合なりとは十目の視るところなりしが、果して舞鶴は養鷹に撃たれてあへなき最後をぞ遂げにける。

小穴―福岡 体格は好一對なりしも、技や優り居たる、氣や勝ち居たる、胴三本の中、二本は福岡。

品川―永松 暫時鎬をけづりしが永松の太刀や強かりけん、惜くも品川は勝を譲りぬ。

谷―西 共に氣さくの劍客にて、やつと立ち上

るや推し立て、先づ一本占めたる西は、確かに荒武者と云うべかりき、彼方も今は氣をいらち、胴を打ちしも下り胴、無念と思ふ間もあらせず、小手打ち取りし西は、勝者の冠をぞ戴きける。

田島―川原 兩虎相對したる其様は、孰れ勝れりとも見えざりしが、川原の氣は敵を制して其技を出さしめず、跳りかゝりて面一本、撃ちし太刀の外れしかば、今迄隠せし直心影のまる出し、大上段に振り上げたる太刀は、空切つて敵の小手に落ち、再び青眼より巻き小手にて天晴れの働きなせり。

濟岡田―田口 喝采の中に立つや間もなく小手一本傷けられし田口は、無念と打ち振る太刀風最と鋭く「小手!」「小手!」と續け様に敵を仆しぬ。

津幡―西 何れ劣らぬ剛の者火花を散らして戦ひしが、西は縦横の突撃に身疲れてふと太刀

振り落し小手一本戴きしが、烈火の如くに怒りて再び打ち込む太刀は、正しく敵の胴に當りしが、戦ひ疲れて引分。

師加茂野―高木 何れと別かぬ太刀使ひのことゝにて、打てば受け、突けばかはし、右より拂へば左へ開き、左よりすれば、右へと跳りて、何時決すべうも見えざりしが、加茂野が美事の胴も其甲斐なく高木が無三無三の面と小手とに打ち敗らる。

濟村上―平井 侮り難き村上が打ち込む太刀を油斷せし平井は受けはづし、面、小手二本で退きし英雄の失意を思はるゝ。

中水野―川原 川原は例の大上段、眞甲目がけて打ち込むこの時早し敵の眼は忽ち之れを見濟まして、倅々然と拂ふ太刀は敵の胴体眞二ツ。

齋藤―田口 激戦數合、流石の田口も刀折れ箭盡きて、一片野邊の烟と化す。

濟中原―岳野 虎爭龍鬪、遂に大男の中原も本陣へと打退く。

坂本―鹽見 逸早き鹽見の刀は、小手一本先づ撃ち落し、残念と叫ぶ間もあらせず、又一本、全じ功名をなしぬ。

鹽山―小泉 鹽山の面は見事に入りしも、小泉が加へし胴と面とに恨を吞んで退く。

師松本―竹中 嚴と構へて容易には寄らざりしが切先交はるや否や、竹中叱咤直進、打ち込む太刀も折れむばかりに面、次ぎは片手突の美事なりしよ。

秋吉―石丸 体格に一步を譲りし石丸は氣を勵まし、打ッて呉れむと立ち廻はれども、大の男はこどもせず、切り結びては離れ離れては結びしが、面一本打ちし石丸の太刀は敵の肋骨を粉摧しひるむにつけ込みすくひ小手。

遠山―松枝 今日遠山の扮装は、黒皮威の具足

にて最と美々しくを見えにける、此方の武士の松枝は、骨逞ましく業にたけ、敵を狙らつて足踏み進め、打ッて跳び退く二三間、私水捧げて「面!」「面!」と叫びしは確かに鬨の聲。

大塚始―平井 曩きに打たれし平井は怒氣憤々、閃く太刀は稻妻の如く、先づ一番に面を打ち、續きて右手を打ち落す、天晴れや江戸の仇を長崎にて。

富島―小泉 敵や遅しと富島が、待つ間程なく顯はれ出でしは小泉なり、太刀揮り上げて先づ第一に拜み撃、更に薙ぎて跪座すれば、敵の死骸は肩を越え、後をさして倒れたり。

大淵―鈴木 打物把ては雞群の一鶴、鈴木は敵を掌裡に弄び、胴に小傷は負ひしかど、面と小手にて天晴れの功名。

小濱―宮山 さも嚴かに構へたりし小濱の体を垂しくづし、露かさず小手を打ちおとし、垂

す刀で諸手突、何かは以てたまるべき、叫びもあへず仆れ伏す。

下川―大塚 忽然相逢ふ兩雄は離合迅速に相働き竹刀の音と呼ぶ聲は相和して凄然たりしが、飛び打ちし下川の刀は大塚の小手の上に、審判官は頭を捻り「小手探ります」と云ふや大塚はまたも切り合ひ胴また小手とを撃ちぬ。

北野―林 骨格美々しき一騎の武夫、北野は膝栗毛に打ち跨り、手綱ゆるく進み來る、此方も同じく膝栗毛、玉よりおろす太刀二つ、北野の面にぞ落ちにける。

加茂野―鈴木 熟れも東西屈指の功者、加茂野は飛鳥の如く、鈴木は走獸の如く、打ち込む太刀音憂々潑々、觀者の視線は忽ち彼等に集注しぬ、加茂野隙を見て、「面！」拍手、撃たれし鈴木は猶ほ綽々然と青眼に構へ、跳り掛りて「面！」喝采、續け様に「胴！」ろうは餘り

を受け留めしかば、然らば「御面！」と一本加へて首を擧げぬ。

小森田―萩野 勇みし小森田は、靜々進む萩野をば見るより早く突き倒し、立たむとするを面一本、次ぎには小手を見事に撃ちぬ。

大塚正―鹽見 靜かに進みて烈しく打ちしが、体力に強弱なく、技藝に優劣なく、勝負なくして引き分けとなる。

富島―竹中 申し合せしかの如く「面！」、「胴！」、忽ち中を隔つる二間餘り、富島右手に竹刀眞直に取りて二王立して「面！面！」竹中は左手に斜に支へて「胴！胴！」歡聲と拍手は滿場に滿つ、審判は徐ろに口を開きて、「一本御所望致します」と云ひぬ、再び寄るや富島の刀は面に當り、竹中のは小手に當りしが、竹中の運や拙なかりけむ刀取り落して敗れぬ。

北野―福山 拍手の中に進みし、兩雄の勝敗は、

北野の面ど、福山の胴と、小手。

上野―加藤 しばし立合ひしが加藤の方や勝りけむ、相手はどんと仆れ伏し、憤然打ち込む怨みの太刀は鶴を失して却て彼方より小手、胴。

米庭―松枝 剛毅の松枝屈竟の木庭、互に疲色見せじと勉め、松枝は一本取りしかど、敵の慧眼果して見破りて、打ちおろす刀をば受け損じて、小手二打に最后を遂げぬ。

江口―萩野 立ち上り様に、血氣の江口ボン／＼と、胴一本多く撃ちぬ。

内田―大塚 惟 犬猫の荒野樹なき地に戦ふが如く、只一戦に大塚の勝。

濱小早川―林 小早川の破竹の流、いかで林の全かるべき。

濱大塚勇―足立 足立老將軍は、面の撃ち様御傳授になつて悠々と御退陣。

高野―石丸 荒手に逢ひし石丸は、面一本と胴

二ツと取り換へ、差引胴一ツの損失。

山隈―宮山 「胴!」「面!」「ヒヤ／＼宮山。

濱長瀬―福山 喝采と拍手とに迎へられし若武者は、之れなむ濟々たる多士の中の巨擘と聞えし長瀬、相手は名に負ふ福山、沈み入つたる其態度、一度近く相寄るや、刀は閃めき身は跳り、打物の音、叫びの聲、相應じて霹靂の如かりしが、バット閃きし一刀を受けはづしたる福山は、小手一本参りしも、事どもせず勇を鼓し、掛聲高く胴を取る、今より勝負ぞと、手に汗したる敵味方の其中にて、長瀬「小手一本!」、福山「参りました」、其言の葉の神妙さ、斯くこそあらめ武士は。

中山本―加藤 悠然立ち顯はれたるは加藤、彼方は熊本中學にて名も高き山本、觀者は眸子を凝らして守りしが、忽ち電光山本の面に落ち流石の勇士も堪へ兼ねて、たゆたう所を隙さす胴を眞二ツに。



歸富永一黒田 會釋終りて立ち向ひ、竊走つた

る聲は正しく富永なり、此方は巖の身構に動きもせず、唯切先にてあしらひしが、隙や得にけむ一聲ともろともに、敵の小手をば卷き撃ちす、彼方は折返し、拜み打ちにて眞甲を、此方は更らに千變萬化に迫りしが、漸くにして小手一つ、師範校の白眉は怨を呑んで退却す。

濟町野―足立 今日こそは天晴れ手柄せんと覇氣満々たる東軍の副將町野、此方は悠々として南州翁の面影したる足立の老將、早まらず迫らず、いざや來れど待ち受くるを、彼方は肉薄飛撃其奥妙の技を盡せしが、遂に秋水を提げて、將軍に謁しぬ。

中河口―有田 雜兵死し、部將斃れ、今や兩軍の總大將は、自ら劍を把つて陣頭に顯はれ、其黒白を決せんとす、東軍の將河口まづ進み出でて待つ間程なく、三尺に餘る野太刀を提げ

、嚴として步調正しく進み出でたるは西軍の將有田なり、互に一禮済まして立ち上るや彼方は今しも喉をば突かんす如く構へ、此方は山岡流の眞青眼、永平に構へたる其光景は、恰も蛟龍の深淵に珠玉を爭ふに似たりけり、さる程に切先既に接せんとするや、河口体をひらりとかはし、退き様に小手一本、兩軍一時に閑つくる、再度近づく其時、眞甲切り込む有田の掛聲、審判官の「在り」の聲、確かに満場の耳底に達せり、彼方は少しく氣はやり、此方の体を推しくづし、打ち遣る太刀風颯と起り、此方の面をなぎ過ぐれば、戦ひ茲に治まりて、東軍勝利、觀者の拍手一度に起り、暫時は鳴も止まざりき。

紅曰勝負の大略は左の如し。

紅 白

鈴木 小早川 白軍の魁したるは小早川、紅軍  
林 小早川 中より跳り出でたるは例の鈴木

松枝 小早川、いでもの見せむと立ち廻る途端、  
 福山 小早川 袴の裾に足や踏み掛けむ、パッ  
 大塚 惟小早川 タと仆れて起きむとするを、早く  
 大塚 惟大塚 も小早川は面をうつ、已れと逸り  
 大塚 惟下川 來る林が小手を、又一本續いて出  
 大塚 惟江口 づる松枝も、面一本を頂戴して退  
 宮山 江口 却、次ぎに顯はれたる福山も又も  
 宮山 木庭 や面にて退きぬ、最早勘忍なり難  
 宮山 大塚 しど、聲朗らかに名乗り出でたる  
 宮山 長瀬 は大塚、四人の仇ござんなれど打  
 宮山 内田 込めば、さすがの小早川も息絶は  
 加藤 内田 ぬ、續きて來るは同じき姓の大塚  
 黒田 内田 なり、いざや勝負と打てかゝるを  
 足立 内田 難なく突き伏す其の一息の隙も與  
 有田 内田 へじど、進みしは曩に小早川の流  
 れを汲みし下川なりしが、面を打たれて引退く  
 、されば大洋近き江口は怒濤を起し、さんぶと  
 大塚を沈めたり、然れども忽ち宮山の埋むる所

となる、續く木庭は進退自由に働きしも、胴な  
 ぐらて、歸らぬ旅、長瀬もまた三人と同じ途、  
 るの敵打たんと内田は鞘拂ひ、拔ぐ手も見せて  
 「面!」、流石の宮山もあへなく斃れぬ、内田は  
 之れに勢を増し加藤を小手にて、黒田を面にて  
 、足立を胴にて有田を面にて、一氣呵成に薙ぎ立  
 て、天晴功名手柄して、白軍萬歳を叫びしめぬ  
 。(菌露)

進級者左の如し

足立精一 宮山平五郎

右二級甲へ

魚住淳吉 西岡達郎 松枝茂雄 萩野安藏

大塚惟精

右二級乙へ

小島祐馬 一田卓郎 服部卯三郎 鈴木彌直

田島丈夫 鹽見勉

右三級甲へ

百十三

ツケットを操縦するの自在なる、先の斯壇の勇將稻川君の面顔をこゝめ、田中君の熱球ショルト左右之に應ずるに玄妙なる、同じく斯壇の名手なりし上床君の遺鉢を傳へておる。白軍の敗れたるも無理はない。次で表れたる松井君美野邊君平生の技倆にも似ず、終に孺子をして名をなさしめた。

次で紅、中學の坂本田島兩君、白、師範の兼丸高濱兩君、中學は多くカツチングを以て攻めしも、師範の確實なる打球に敵せず。同僚の恥をそぐべく立つた中學の岩吉加藤兩君はよく白軍を刺して憤を晴したが、其場を去らずに、師範の坂田齋藤兩君に倒されてしまった。

紅軍の中堅、斯壇老巧の將、原富黒瀬兩君がたつた。其熱球半ば綱にかゝり、コートを逸せしも、白軍の余り慎重に過ぎし隙に乗じ、その二組を連破し去つたのは、流石老巧の士たるを失はなかつた。

紅、中學の小田君長野君、白、小田君釘本君と對した、一方は中學の御大將、部下の戦死を遺憾とし、健氣の態度何となく殺氣を帶て見えた。白軍も一は老巧の士、一は新進の士、腕に頼む所あれば泰然として騒がぬ。双方秘術を盡しての戦、球は變幻出沒暫し偉觀を呈したが、勝は終に白軍。

球の方向豫知すべからざるを以て怖れられたる伊藤君、バウンド地に喰付くが如くなるを以て畏れられし工藤兩君、何れも紅軍の重鎮。白軍は釘本君の巧も、小田君が球多く奏功なきとプラス、マイナス、遂に敵をして名をなさしめた。

然し師範の上田君桑原君出るや紅軍直ちに敗れ之に代りしは宮川君と宮本君。君等は吾校の精英である、しかし如何にしけむ今日は平生の目ざましき手ぎわが出なかつた、それに白軍の上田桑原兩君は師範の大將責任は自らその双肩にあり、優退の策を得ずんば京陵會の名を如何せ

んどの意氣込、桑原君の熱球よく功を奏するの  
と上田君の機を見るに敏なるよく敵の球をして  
場外に逸せしめしと相應じて勝は白軍に歸した  
。兩君拍手の間に優退。

紅軍の大日方吉見君、白軍の松重後藤君、共に  
新進の猛者である。殊に吉見君のバックは、万  
人の共に戰慄する所、大日坊君のボーレイ亦侮  
るべからず、之に對するに松重君のカッチング  
バックあり。後藤君の着實なる態度、殆んど逸  
するなき打球、此頃一流の壘を摩するものがあ  
るので、觀者は今相手の内には是等の戰士を迎へ  
るのであつた。

戰は始れり、吉見君のバックはよく敵膽を寒か  
らしめしも、大日坊君得意のボーレイ多く網に  
罹り、松重君のカッチング亦網にかゝりしも、  
後藤君の熱球多く大日方君の足を襲ふものがあ  
つたので吉見君は怨を吞んで退いた。

此時拍手の響は盛んに起つた、見れば、紅軍の大

將草野加藤の兩君が陣頭に立つたのである。草  
野君は此頃コート上に見る事が少ない、而し曾  
ては覇を龍南に唱へし人、其球の確實なる、其  
打損の稀なる、陰然一方の雄なり。加藤君に至  
つては、ラケットをとること六年、其間交戰  
幾百回、敵を斃す事無數、其スタイルの整然た  
る、其球の猛烈なる、實に本校の粹である。特  
に其バックのボーレイに至つては、萬人の等し  
く嘆稱する所、今や此兩將はしづくと立てり  
、審判官のプレイボールの令が下るや、今迄拍手  
し觀呼くつゝありし觀者は、片唾を吞んで見つ  
めた。壯觀は將に演ぜられんとしておるのだ。  
加藤君の熱球網にふれん斗りに飛び、彈丸の如  
く突入して敵の左野を襲ふた、左野の守將後藤  
君。泰然としてラケットを一振せり、見よ、  
球は今其來りし時の勢を以て、敵の右翼に飛ん  
でいつた。右翼を守る草野君は之をいかにか  
せる。彼は滿身の力をこめてうてり、然れども

惜ひ哉、機を逸する一瞬、球は下りて空しく網をうてり。更に後藤君は、熱球を加藤君の足下に送れり、されど幾千の戦場を経し勇將は、咄嗟の間に身を開きてシヨルトを打てり。其將は再び後藤君の頭上にとびぬ。彼はボーレイを以て草野君のバックを襲へり。しかし此人また場馴れし勇士、いかでか斯る球に破らるゝとあらむ。彼は後藤君が今チットの前に立てるを見て、フライを打ちぬ。軽捷なる松重君は飛鳥の如く、とんで之を打返せしも、噫其球は強からざりき。加藤君は今脱兎の如くおどりて、其得意のバックを以て敵の右翼の角をつきぬ。拍手は起れり。兩軍の戦は斯の如くして開かれ、斯の如くして終つた。其球の變幻出沒なる、其スタイルの整へる、観るものをして感に堪へざらしめた。

一方は全軍の勝敗を双身に換へるも、一方は敵の副將を仆して、氣鋭將に敵軍を空ふするもの、其秘術を盡して戦ふや、變幻の妙を極めし亦宜

ならずである。紅軍の將は睥睨して白軍の驍將山口君山元君を迎へた。拍手は再び起つた。白軍の將は全軍の勝敗を決すべく立つたのであるが、敵將ははや其頼とせる副將を仆して意氣旺なるものがある。勝敗の數は初めよりわかたつた。勿論全軍は紅軍の手中に歸してゐる。大將は破るゝばかりの拍手の内にコートを退かんとして居る。

まだ時があるので、此日競技に加らぬ筈であつた岩松君と、遅れて來られた赤木君とは、白帽を戴いて今や自ら全軍を破碎し去つて拍手の内に場を退きつゝある紅軍の將をさしまねいて登壇した。

兩人とも斯壇老巧の將である。岩松君の球は熱球にあらざるも、確實である。弱しと雖も、失敗が少ない。其ライトも、バックも、ボーレイも、シヨルトも、兎に角打洩すことは稀である。まして變に應じ機に乗じ、敵陣を亂して其隙に

乗するのは其獨特の長所である。赤木君に至つては、之亦一方の雄である。此頃の進境は實に驚く斗りで、優に第一流の壘手を壓して、塹然頭角をあらはしておる。そして其球は岩松君のよりも一層大膽で、其確實なる點も劣る所がないのである。今や此兩將は、紅軍の鼎の輕重を問べく登つた。相手はまた起つた。紅守り白先せむ。

第一戰、白勝。

第二戰、紅勝。

第三戰、白勝。

第四戰、再び白勝つて、念白軍の勝利となつた。其戰のさま草野加藤君、對松重後藤君の時のめく花やかではなかつた。目覺しくはなかつた。しかし流石は老巧の士である。一つも無駄な球がない。互に虚をつき、實を窺ひ、其間の趣味津々としてつきざるものがある。之等の人の戰はボールの打方や、スタイルを花やかにすると

云ふ斗でなく、敵の虚を衝くと云ふ戰略が含まつておる。自分の目の前に來たのを打返すと云ふシンプルのものではなく、かく打ては敵はかく打返さん、其時は我は此隙に打込まんと、三つも四つも先の見こみをつけて争ふのだ。それで熱球を打込む必用があれば、熱球をうち、弱い球で敵を刺す見込がつけば、ソフト弱い球を網の前に落すこともある、カッチングが功を奏すると見れば、カッチングを見舞ふのである。變幻自在で、出沒はかるべからざる所がある。あゝ實に庭球の趣味はこゝに存りだぞ得意らしく一口をへたのも、あながち考婆心からでもあるまい、呵々。無事に終へたのは午後五時半、夕日斜めな時であつた。(みどり、わかば合評)

### ○嗚呼秋山音藏君

君は熊本の人、性質篤實謹直、特に非常の勉強家にして、其の濟々費に在るや、英才の名全校

に高かりき。一昨年我校に遊んで工科二年に在り、刻苦勉勵、又た能く一部の才能を喚發し、實に有爲の青年として目されき。然かも君や弓術に巧に將た劍道に熱心に、本年の寒稽古の如き一日の欠勤なく、常に能く學び能く遊ぶ事を忘れざりき。然るに一朝肋膜炎の襲ふ所となり、臥床百餘日、一度は快癒の望を囑せしに、夏天無情、病勢一變して腦膜炎となり、八月十九日、溘焉として幽冥不歸の客となられたり。聞く君臨終の兩三日前より書を讀んで遂に止めざりしと、嗚呼君の如きは實に學問と戰つて倒れたるの人と謂ふべし。遮莫大丈夫四方の志、豪然として青雲に向ふもの、其の業未だ成らずして半途に夭折す、人世の恨事何物か之れに過ぎむや。白川の流水と龍山の落葉と、君も夫れ逝て復た舊に歸らざるか、噫。茲に追悼の意を表し謹んで弔す。

## ○無題錄

○試験、点数、之れ何たる凶韻ぞ、履修せし事をよく了解し居るや否を驗して、其優劣を區別するはさもあるべき事なり。然れども試験は單に筆さき細工に非ずや。これを以て果して人を高下するまでに驗し得るものこそせば、吾人其の餘りに躁計なるを嘆せざるを得ず。且つ其点数の不良なる者は、落第として再び同じ事をくり返さしむるは、さまでの恨事に非ずと雖も、其の餘りに成績の宜しからざる者は學業進歩の見込なしとの宣告の下に、折角入學試験と稱する難關をきりぬけ來りしかいもなく、一瞬の歡喜、夢となり泡と消え行く薄命は、遂にヤケとならざるもの尠かなからざるべし。落第は或は力の足らざるによるあらん、又た遊惰放逸によるあらん、而して落第既に好字面に非ず、況んや落第以下の者をや、然れども此輩今一ヶ年落第に止め置きては如何、必ずしも害あるなく、又



多くば其落第を重ねざるべし。既に規則として二たび同じ級にて落第するものは除名すとあるに非ずや。未だ二たびならずして之を逐ふ、少しく残酷の行爲にあらざるなきか。然り而して同じく落第者にして除名せられたる者と、せられざる者と其間幾何の差ありてか、代數の十點か三角の二十點か抑も獨逸の十五點か。なまじいには果斷の所置、人の子を損する事少なからざるべし。

○借問す、點數のため落第又は除名に致たさるふは、或は成業の見込なく或は昇級の資格なしとの故とせば、何そ身体の薄弱なる者を除名となさざる、同じく成業の見込なきに非ずや。何ぞ人物の劣等なる者を落第となさざる、學校は單に學問の賣買問屋に非すと云ふに非ずや。

○然りと雖も、之れ唯無意義の論のみ。點數の多き者はエラキなり。實力なると、一夜漬とは問ふ所に非ず。實際と、ゴマカシとは問ふ所に非

ず。人格の修養、道德の如何は問ふ所に非ず。唯だ夫れ點數なり、故に點數を望む事渴するが如く、試験を恐るゝ事虎の如し。試に一例を示せば、無届欠課は減點に處す、曰く何、曰く何と、實に點數は教師の生徒を縛する唯一の鐵鎖にして、又實に生徒は點數の桎梏を籍められたるなり。高等教育とは試験と點數となり、故に點數を欲すること餓狗の腐肉に於けるが如し。されば、自ら知らざることを知りつゝも僥倖を期し出放題に答へをなして愧色なし、何たる陋事ぞ。

○先年禁酒令出でゝ酒のために追放せらるゝもの、三々五々、令を犯し宜誓を破るのは是非は云ふまでもなし。而して常に探偵を放つて之を探ると、嗚呼、法の至れり嚴なると云ふべし。然れども、天下の罪惡、破廉恥の行爲をなすもの未だ何等の罰を得ず、白晝大道を横行して、探偵亦嘗て之て目を注がず、法又寛なる點ありと

謂ふべし

(かつ生投)

## 寮中漫言

### 寄宿舎

○夫れ天地は萬物の逆旅、人生五十、畢竟假りの世にあらずや。宿屋と見れば天地も宿屋、人間社會も亦宿屋のみ。寄宿舎の下宿屋然たる、何ぞ怪まんや。

○試みに思へ、寄宿舎は東西諸縣より來れる一面識なき人々が單に相集まれる所にあらずや、此處に兄弟の親なく、父子の愛なきはこれ當然のみ。

○而も意氣相投すれば一見舊知の如く、投せざれば交ること百年なるも尙新なるが如けん。人生畢竟意氣に感ず、意氣相投するの友を得ば以て満足すべからずや。必ずしも総ての人と知るの要なし。

百二十

○意氣相投するの友は、旅窓一夕、猶且つ之を得ることあり。一年乃至三年の寄宿舎生活間、豈此種の友を得るの機なからんや。これ以て満足すべし。

○然れども吾人は其他の凡ての人を疎んせよと勸むるにあらず。誠を以て人に對す何人か疎んずべき。同じくこれ寮生なり何んぞ其の間に私心を挟むべき。唯だ必らず総ての人と兄弟の如く親しからざるべからずと言はざるのみ。(梧

蔭)

### 寮風

○校風を起さんには先づ寮風を起さるべからずと噂せらる。然り、學寮は學校の中堅なり。校風先づ此處より起らざるべからず。

○然らば如何にして寮風を起すべきか。形式的規約の變更、形式的學寮會の決議によりては、これ遂に起すべからず。唯望を囑すべきは寮内健全なる諸君よく一致和合して自ら奮ふにある

のみ。

○如何なる寮風か最も望まじき。剛毅朴訥可なり、勤劔尙武可なり、勇敢にして廉耻を重んず可なり、博愛にして公義を重んずる可なり、寮生規約の四綱領最も妙なり。唯願くは外面的形式的に流るゝ勿れ。(紫煙)

### 自治

○自治の實は其精神にありて制度にあらず、近時自治を語れば人直ちに制度を云々す。徒らに制度を云々するを止めよ、此精神なくんば制度遂に何の用をなすものぞ。

○自治の精神は克己の精神なり、已に克つ能はずして焉んぞ自ら治むることを得ん。願ふ、寮内幾人か克己の王風を積める。幾人か情氣と我欲に打ち克つ王風を積める。

○我邦人は既得の權利を利用するを知らず。先づ之を利用するにつとめよ。徒らに權利々々と叫ぶことなかれ。(浩洋)

### 活動

○物平を得ざれば則ち鳴ると。近來活動活動の聲ある、これ平を得ずして鳴るものか。活動可なり、これ頗る妙。而も活動にも種類あり、考へざるべからず。

○余は思ふ、最良の活動は遠足なりと、遠足の字に注意せよ。かの瀛車馬車にのみ乗り行くはこれ遠足にあらず。

○請ふ、郊外に出でて新鮮なる空氣を呼吸し來れ、宇宙の偉大に接し來れ。自然の無邪氣を味ひ來れ。是れ實に精神上にも身躰上にも實によりき養生也。

○且つ仰ぎて天の蒼々たるを見、俯して地の悠々たるを見る時、他の安排を借らずして其布置自ら宜しきを得たる山川に接する時、靜かに無心の花鳥を観る時、十里の山河を踏破し來りたる時、心中の爽快何ぞ言ふを得んや。晚餐の味美なると、床上の眠安らかなるとは更に之に加

へられたる賜なるすや。吾人は諸君の健脚誠によく天下を蹂躪するに適するを知る。

○次に望まじきは夜の金峯登山なり。山の静かなるそ夜の静かなるを相合して山上更に寂莫、而も静に聞けば宇宙の偉大なる聲は此裡に響くに非ずや。一穗の提灯一顆の握飯、之を試みる可。

○江津湖上、端艇を走らす、これも亦可。而もかのレースはわれ其宜しきを知らず。レースはこれ勝散を争ふなり、無理なり。豈悠々自適、恣に漕ぐの無邪氣なるに如かんや。

○擊劍道場、劔火相交め、進んで心を以て心を撃つに至らば、其妙何と言ふべけん。區々末技を争ふは何ぞ陋なる。君子は取らざるなり。

○柔道、體を養ふに可、活潑なる精神は健全なる身体に宿るとせば豈亦可ならざらんや。而も氣を養はんは遂に擊劔に如かず。

○相撲、何ぞ男らしき。此男らしき赤裸たる相撲

をして長へに盛ならしめよ。土俵場上、青草を離々たらしむるは不可。

○フットボールはありや。曩きにスウ<sup>※</sup>ート先生によりて此技漸く盛ならんとせしが、今果して何の状ぞ。余は公德と制裁とを此間より養ひ來らんと思ひしに、今寂として聞ゆるなきは何ぞや。(穎川)

### 活ける平和

○活氣ありて而も平和なる、平和にして而も活氣ある是を活ける平和といふ。活ける平和は望ましきかな。

○只漫然として活氣を叫ぶも、活氣何ぞ起ることあらん。寮中を一括して活氣の興らんとを願ふも遂に其効を收め難からん。然らば如何にせばよき。

○學寮の五部に分たれたるにつきては、多少の非難なきにあらざれども、余は寧ろ之に賛す。

學寮五分せられて同部の人は同部に集まる。故

に相知ること早く、相親しむこと密なり。願くは各部各よく和合親睦して互に活氣を養ふにつとめよ。是れ却て捷路なり。而して之が牛耳を取る、姑らく室長諸君を煩はさんか。

○活氣各部より起る。而してよく調和せざるべからず、よく一致せざるべからず、衝突すべからず、撞着すべからず。衝突撞着は平和を破る所以なればなり。而して此調和のことは姑らく幹事諸君を煩さんか。

○而も此調和の根本的要素は各人皆學寮なる觀念の下に相一致し、少しも己を挾まざることはなり。これなくば幹事如何に勞するも其功少からん。而して是は是れ室長室員各自の責任なり。

○以上の事若し行はれんか、活ける平和は容易に求め得べし。誠に容易なり。必ずしも慷慨議論するを須むざるなり。要は唯誠實にして無私なるにあるのみ。誠實無私、余は之を以て徹上徹下の大根本とす。吾人は正に來れる新學年に、室

長幹事たる諸君が能く此要素を供へられたるを見て、吾人は先づ大に喜ぶものなり。(白山)

### 片々

### 彌次マツチ

○彌次マツチ余り面白き稱呼るあらず、されど吾人は是によりて、二大所益ありと信ず。一に曰く體育、二に曰く親睦、運動が體育の主要なる地位にあることは更に言を俟たず。殊に少數の人士によりてのみ握られつゝありしバットが、嘗て觸れしこともなきものゝ手に接するに至るは喜ばしき事の一つなり、書淫者流が強て出され天空快闊の運動場裡に嬉戲する、中々に趣ある事にはあらずや。

○生徒が相遭逢するも宛として巷途の人の如し、とは近時に至りて殊に甚しく、龍南風氣の頽廢を具體的に表示するものにはあらざるか。その茲に至りし所以は必ずや理由あらむ。吾人は其の一つとして相識の機會の甚だ僅少ななるに因

すとなす。その穿てる袴、その被れる校帽が如何に相憐の情を發するものなるにもせよ一度びも面語せしことなきものに對して脱帽屈身せよと迫る、余りに情を無視せる者にはあらざるか、然るに輸贏已に決して各芝生の上に離座し談笑諸語に少頃の時を費さむかその中油然として相親の情を發せむ。端邦館裡、呻を咬み占めて六ヶ敷き訓言を拜聽するよりも、校風振作の上に資すること万々。是に至りては彌次マツチ遂に捨てたものにあらす焉。(蛇骨)

### ○部長更迭

擊劔部長會田教授は今回辞任せられたるに付き後任に兒島教授を推選せり。

### ○委員變動

龍南會雜誌部委員原正義氏辞任に付次點者山本陽氏後任となる。

### ○特待生

本學年間特待生左の如し

機械工學科第四學年生	白木 一雄
土木工學科第三學年生	和田 正一
全	清岡 已九思
機械工學科第三學生	辛嶋 淺彦
全	井手 眞一
全	島田 比樂
大學豫科第二部第三年生須山 正躬	正躬
全	第一部第二年生西 浩
全	第二部第二年生 重光 簇
全	第三部第二年生 酒井和太郎

### ○炊事委員長

本學期炊事委員長は左の如く當選せり。

購入長	福富 卯一郎
保管長	明石 眞隆
會計長	黒田 孫一

### ○學寮會幹事

本學期學寮會幹事選舉の結果は左の如し

工學部	和田 正一
第一部	高田 保馬
第二部	黒田 孫一
第三部	蔵松 彌信

○寮制改正

習學寮細則中左の通り改正せらる。

第六條 室長は室員の互選とし舎監の認可を経べし

第十二條 前條の手續を経ずして午後十時後歸校したる者は其氏名を門衛に通じ歸寮の際其事故を詳記したる外出先の証明書を差出すべし

第十三條 己を得ざる事情によりて外泊せんと欲する者は其事由を申出で生徒課の許可を受け歸寮の際外泊先の証明書を差出すべし。

第十四條 外出中已むを得ざる事情ありて一泊したる時は歸寮際に二泊以上に及ぶ時は外出の日より三日以内に其事由を詳記したる外泊先の証明書を添へ保證人連署の手續書を差出すべし

○叙任辞令

七月十三日

叙正六位

教授

長谷川貞一郎

全

全

武藤 虎太

叙従六位

全

白壁 傑次郎

叙正七位

全

那須川 良

七月十七日

任静岡縣技手

助教授 近藤 正義

八月一日

備外國教師ドクトル、フリトリヒ、アルノルド、ハイン

ウイリヤム、イ、エル、スツ井ート

本年八月一日ヨリ明治三十九年七月三十一日マデ滿三ヶ年間、  
備繼カル

全

ヘンリ、エル、フアーデル

本年七月三十一日ヲ以テ備期限滿期ニ付解備

八月十七日

教授 神谷 豐太郎

製造冶金學研究ノ爲メ滿二ヶ年間獨、米國へ留學ヲ命ス

九月十四日

任陸軍技手

助教授 三浦 峯太郎

九月十四日

獨乙國人ナタニヨリ、フリツテオン、ウエンクステルン

當校英語、獨乙語、羅旬語教師トシテ本年九月十四日ヨリ明治三十九年七月三十一日マデ備入

九月十八日

陞叙高等官四等

教授

川口 虎雄

九月十九日

依願免本官

教授

會田 龍雄

十月五日

任第五高等學校助教授

東京府技手

大平柏三郎

十月十三日

叙從六位

叙正七位

早川金之助

藤原喜太郎

長澤 泰知

田川 新吉

## ○寄贈雜誌目錄

國士

自五八號至六號

無盡燈

八卷自七號至九號

六合雜誌

自二七一號至二七三號

和融誌

自七卷七號至九號

教育時論

自六五六號至六六五號

新人

四ノ九號

九州教育會雜誌

自二二〇號至二二八號

實科教育

自十號至一二號

教育公報

自二七三號至二七五號

家庭新聞

自八號至十號

興風會雜誌

(早稻田中學) 七ノ二號

坂東太郎

(前橋中學) 三六號

校友會雜誌

(豐浦中學) 八號

百二十六

麗和會雜誌

(浦和中學)

六號

學友會雜誌

(宮城第一中學)

十六號

學友會雜誌

(札幌中學)

八號

研瑤會雜誌

(長崎醫學專門學校)

五五號

九十九會雜誌

(成東中學)

五號

學 林

(愛知第一中學)

五六號

學友會雜誌

(島根第一中學)

九號

城 北

(東京第四中學)

四十號

七 生

(島根第三)

九號

榮 城

(佐賀中學)

一八號

校友會雜誌

(臼杵中學)

二ノ二號

鯉 城

(廣島中學)

十號

華 陽

(岐阜中學)

三二號

保惠會雜誌

(松山中學)

八〇號

學友會雜誌

(長崎中學)

二四號

渦ノ音

(德島中學)

六號

獨乙語學雜誌

六ノ一號